

嬉遊笑覽

卷六下

和書門				
三	六	七	二	五
一	四	二	二	二
一	三	二	二	二
冊	架	函	號	類

庫文閣内				
三	六	七	二	五
一	四	二	二	二
一	三	二	二	二
冊	架	函	號	類

内閣文庫		
番號	和	36725
冊數	13	( 9 )
函號	209	109

九



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak





嬉遊笑覽卷之六下

喜多村信節撰

兒戲(飢好) 芝ほの眼れろくくの類 かくめん 隠れ遊(鬼)と耳ひき指さる ちんくもんがら  
竹馬鳩車 べうかうがさし 手々甲 てんかう うふめ もぐ もんぢい

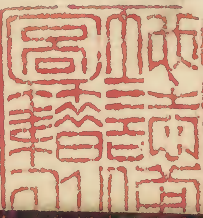
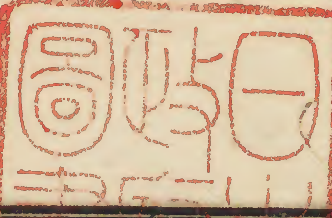
佐夜中山集(付句橋本富長)さぞなどもろと夕なみの紋撫子の風ふふられてかぶりく(郡山千久)河原お  
よする水のわいくまた鷹筑波集(鶴冠井辰次)わらひ手へあひをするう山の口漢土の俗小兒を哇々と

いふ説文咳小兒笑聲孟子孩提之童注知孩笑とあり廣韻哇小兒聲とみゆふ頭なり日本紀小兒驚都々伊  
また頭驚ともありまた隣女悟言小兒の頭をふるをうふくといふこと古き詞なり神代紀小兒傾也を

加夫志と訓し天智紀小兒垂額而熟をうふしてあうらめりと訓す此ころなり散木集稻のかたふくを見てお  
ぼつうなたが袖のこひきかさねほうしこのいねかふしをりけん節信云ほうしこ小兒をいふほうしこ  
の稻と實いりよくて頭のおもきを小兒またとへうふすると作りしなるべし

○正章獨吟千句よにらむ目もどまじる搥のめ雨の膝お繼子ほんの子すへ双べれろくく和訓栞に遼來  
の轉語なり蒙求の注ふ江東小兒啼怖之曰遼來々々無不止者とみゆ遼ハ張遼なり此説ひたとなりれろく  
轉じてへろくともいふべろくくの神ハ正直がみよなどいふ何の故事何の義といふことの有べきべろど  
い舌の形容をいふなり

○懷子俳諧集(二)胡蝶もやねねと眠る花の影(弘永)風流つれく草おねねやおころくくと彦子さま  
がたをすうすも上つた乳母連のむつこをぞうしをを下つたあてねろくくこの子よといふなりね  
んねんぼうしや小ぼうしとすうし給へどあるものすきむうしよりいひけるとおや庭戸の皇子いとけなく



嬉遊笑覽卷之六下

喜多村信節撰



まし／＼し時后還のうく仰せられけるとぞ太子傳記も見えたり又四天王侍人櫻(中邑阿契作)といふ淨  
るりお楓の井が涙と共に添乳うたねん／＼法師小ばうしや禰宜羅らぐいふとするす聖德太子幼稚の時  
月増日増が子も歌傳へて今ふ云ふやすなせあるのまこと狂言綺語ふて子も歌の証あだちた  
くや又子も歌ふ七里が濱の砂の敷どうたふ半井ト養落髮千句わき時さへ秋のよすが身もまひ  
子もちがいのふしはさよはまのまことの敷はともいや松の葉裏組錦木よ七里おばまの砂のうすほどお  
もへともと有り

○てい／＼又たい／＼共いふ續山井餅つゝじたい／＼するやわらべの手(攝州正次)祿を重とどりなすな  
り古くハ小兒ならでも物を乞ふなせよ用ひし詞なり狂言記(山だち)にていとおこさぬ(同續集の内  
ふもこの詞あり)又犬子集(貞徳)秋の夕の蚊のまきさよていとふとおさらぬ文ハ露涙また醒睡笑  
(七)思の色を外いふといふ條、常家の者あやまちて高き處より落さまふ念佛をいひけるをいたる人の  
云やう題目を念せすしていくなればあましく念佛をバツつるやと問さればよ先の落さまはていと  
死ぬると思ふた是をおもふ今てうといふ言ふ似たるやうなれどあわらず今ちやくと云言ハ速なる  
を云ちやく／＼零してちやつといひ又てやき／＼とも云是なり

○耳底記問(光廣卿)云ユツンの詞と制の詞との差別如何答(幽齋)制の詞といふハタイと禁制するなりこ  
てんといふハ制の詞あつて用捨あるべきとになりなり／＼ハ我戀ハなせ古点なり○處々にてん  
云ともみゆこれ主あるとばなど云類なりさていといハ屹とあるひハまうと云ふ詞あ近しタイと耳底  
記日ぐらしの灘の條このたきハ名所あてゐなくて名あり此類多し此やうなをばていと日ぐらしの灘と云

ふやうふハ詠ぬものなりたどへばなせやらして日ぐらしのたきのなと云やうふよむものなり

○小兒の人みありするをおもさういといふ古歌お世の中ハいどけなき子のおもぎらひみしがなきおぞね  
いなるける又新撰六帖わきまおさだあさはやつゝむらんかみふりあけておもがくしする

○俳諧懷子(万治元年)釋氏任口が跋ふあそこまゝらのとを拾ひ書あつめはハお入云ふあなあさなや蜷島  
の直なる道わいわいやをもせず筑波の正しきとよハダてん／＼をもせでかぶり／＼をふらバ誰うてうち  
／＼の手を打てあハ／＼と笑ハらんや又古今夷曲集(寛文五年序文)おさわいをおひやてうち川水の阿晒  
和いな船の掉頭／＼土佐の手／＼甲大和の元興寺隱期などやうのとをもてつらねういちらす

○小兒の詞ふ足をあんとといふハあゆむ事を教ゆるふあんとハ上手といふ是なりこのとを漢字ハ桑と  
いふとみえたり鶏肋編易正義釋桑頤云是動義如手之捉物謂之桑也今世俗以手引小兒學行謂之桑莫知其義  
以此觀之乃用手捉則當爲桑也類柑子千里の濱八百日行道あるべせんとてあんと／＼とはやしめていざな  
いれ行云

○斗／＼運歩色集お倭國小兒呼魚曰斗／＼類說云南朝呼食爲頭呼魚爲斗故(南朝ハ宋齊梁陳など江南ふ都  
ありしなりあれ北戸録ハ前朝短書雜記即有呼食爲頭(注零)以魚爲斗注ハ梁科律生魚若干斗とあるあれな  
り墨莊漫錄云吳中魚市以斗計(一斗爲二斤半)などあるあて知べし魚のとを斗といひしハ非ず計ふるの  
法なり

○隠れあそびハうづばまた菜花物語なせふかくれあそびのしらけたるとをいへるハ今のうくれんばな  
り今ハ目うくしとかくれんばと二種なれども／＼と同職なりめうくしをめんないちどり共いふ福富草子ふ



めなしと軒のすいめといへり一休の水鏡めなしとち／＼聲あつてましませとある注ふとち／＼と尋るとばなりといへるへりしとちへ友とちなどのとちふて同志の意なるべし今めんないちどりと詠れるへ雀といふがちどりふなりしにへあらずとちといふが倒ふちとなりさてもし添たるもの元又へ前ふ一ツの名あて目なきものへ足もとをちどりふたとへたるふてもあるべし佐野紹益が腹草ふ今頃へやよひの半なり軒の雀とて外の鳥よりへ人近きものふ侍れども人をれそるへ事すこしもゆだんせず此ごろへ常の如く早くへ赴さらず家の内迄も入て餌をもとむ子をやしなひ侍る故なりとあり是軒の雀の義なり俳諧句帳親重が句雲ふ月うくれんがううかつらのと（此句犬子集ふも見えたれどもそれふの名をえさす）古今夷曲集ふ題えらす（行安）小姫子のうくれさふさへまじらぬへも桂のはもじなるべし風流徒然草其譯知れぬよと侍りかくれんぼうふまじらぬ者うちつちや子持やうつらの葉といひ子供のいふとなりと有り行安が狂歌も是をとれるなり吾吟我集山居せば奥よりれくうくれんがう跡をも人のたづねてぬはと續山井花見ふへ人ふうくれんぼううし哉（一笛）かくれとするう葉うけの兒さくら（次長）小櫻もせよや風あへうくれんが（守昌）季吟甘會集寛文十二年の巻あつまりて遊ぶ桂の里子供（宗英）かくれんがうふまじらぬへなし（季吟）崑山集（慶安四年貞徳撰）つちやこふしかつらの里あうつ礎（吉景）後砂金袋（西武撰）月うつるつちよふふしよ桂の葉なせ見えたり（天然）桂と云もの桂お似たるものなりやふよつけいしなり諸州方言多し其内つちよ呼ぶさつま肥前因幡等ふてしう名く思ふふつけと云へこれふやもどつけと云しがつふなりたるういづれ此の訛言なるべし）さるを信田小太郎と云上るりふかくれんぼうふまじらぬものへわふちやふちやかつらのへぞうりかくしうたぐま足のつめたいちよま／＼走りと云るへつ

ちと云と分らぬ故さかしらあふちと改めしなり物類稱呼うくれんば出雲あてかくれんを相模あてうくれんまやう鎌倉あてうくれんば仙臺あてかくれうしかと云ふ

○此戯も一極めて鬼となる者を定むる事あり其時いふ言を江戸ふて「かくれんぼうあふよふあるものうさつくれんがうととりやそつちへつんのきやれ（又づん／＼）つのめの云／＼中切て／＼ちやひぢやが鬼よともいへり出羽庄内あてへ先幾人あても互お拳を握り出して是を順お數へる如くいふ「うくれんぼちだてやなわなめちくりちんどもとじきまふのおけたのけ又」にざりたざりまふたざりおけたのけとも云へり又江戸ふて「いち／＼くた／＼くといふとをもするなり簀織輪お寵愛の餘り猪口迄おいとしはいち／＼くちくち毛だらけな腕（千雪）彼ち／＼や子持もふの一極めていふ事をするふいへりし諺なるべし漢土ふてこの戯を捉迷藏といふ郷環記ふ玄宗楊妃とこの戯をえたるよしみゆ此遊ひとへ異なぐら芥／＼くし又草履くしありいづれもおなじまうたよて一人尋る者ふ中りたるお隠せし物を求め出さしむ尋る者を鬼といふ明和二年川柳点付朝のうらさうりくしを廊下でし（妓女の禿をいへり）甲乙次第を定むるふ草履をかたかた脱てふれをあつめ空へ向ひて一度お投げ馬う牛うと云其伏仰をいふなりたとへば象棋の金う歩うといひ碁の調う半うとてするのごとし

○鬼と物類稱呼江戸あて鬼見たし京あてつうまへば大坂あてむうへや東國及出羽邊又肥の長崎あて鬼ごと／＼いふ奥の仙臺あて鬼／＼津輕あておくり／＼常陸あて鬼のさらといふと有り子をとる子とろといふ鬼ごと／＼和州天の川弁財天の祭式ありとどなむその原へ三國傳記ふ惠心僧都閻羅天子故志王經をみて其心をとり童を集め地獄と獄卒と取むとふれととする學ひをし始て比々丘女といふといへり後京極攝政長經



公の作庭記凡石を立る事へあぐる石一兩あれは追ふ石ハ七ッ八ッあるべしとてへ童部のとてうく  
ひるくめといふたふれをえたるがごとしとあれは鬼ハ多きとえらる今するとい異なりさて鬼わたり  
といふ事もこれより變じたるや月令廣義の打鬼戯ま帝京景物略の替鬼なともこの類なり前句付廣津  
海目をふさぎけりくかくれんば聲のうさなるみほづくし或人の狂歌あやうくふつまめる髪角たて  
まんまぐへふが鬼わたりする

○帝京景物略云小兒共以繩繫一兒腰牽焉相距尋丈迭手不意中拳之以法曰打鬼爲擊者兒所執者者聞然共捉  
代繫曰替鬼更繫更擊更執更代終日擊不爲代則佻巧矣されん撃んとする鬼を執ふるなり又云繩以爲城二兒  
怕蒙以摸一兒執敲城中輒敲一聲而輒易其地以誤之爲摸者得則蒙口敲兒曰摸蝦兒これ又捉迷藏の類なり  
○浮世物語(前引)鼠まひ小路ぐれ云あり(新井白石佐久間洞巖お贈る書み人の亡命したるを小  
路がくれの様のとて云ういへり面なくかくる意あや)鼠まひへ出んとして出ざるなり元陽が離身  
のうへ(三)庄や殿の一人の子もちたれ共此子うちねすみにて我うちより外をえらすといへる是なり又出  
ずバ耳ひことへ鬼おなりたる者のいふ言なり鷹筑波集(塚口重和)出すバ耳ひくべき月の兎うな簗絨輪(一  
十一集)火傷ならず果報おも引耳の睡とあり此らと異なぐら耳ひく種なり

○又小兒いさうひなどして中なほり互ふ小指を曲て引くるを心とけたる験とすこれを指きりといふも  
をうし懸路お指を截るをいうお心得てえそめしう指きりハ西武獨吟月の出と又ハやくとく指きりをす  
るゆびくひが露涙自注お約束ゆびきりを付るなりゆびくひの女ハ源氏とさいの巻あり後撰夷曲集  
ゆび切や地獄の釜へはつとちとちと云ハ二世のけいやく(安勝)この歌行風が旁注お童口遊詞とあ

り又小兒約束をして違へといふ印お油燈文とて髪のお指を付て柱などお押とあり燈文の印肉よりお  
もひよれるや

○又ちんくもんぐらハ松の落葉(三)づんぐらもんぐら踊といふ小歌あり是なり(隈取阿宅松といふ芝  
居歌おちんぐらと云り後撰夷曲集いせ参りあてきぐらうひく足もたびうさなればちんぐらどする)

(廣通)

○古の竹馬ハ葉の付たる生竹を弄べり古書ふみえたり又福富草子ハ童子の持たるハ二本ふして今の製お  
近く但し木にて作りたる物とみゆ江東部集ハ七歳初讀書騎竹驪樂泉九歳始言詩舉花戲霞軒古歌に竹馬を  
今ハ杖ともたのむうなりあそびとおもひ出つ(此心にや温故集ハ道谷が竹馬や杖おなり行けさ  
の春)竹馬ハ友人醒齋が書るもの有おもれも雜考の中ハ載たるありそれらのことハハ零きていさ中  
山三柳が醒齋隨筆お端午戯作あり剛木作刀紙作旗揚々竹馬着鞭騎兒童妄習陣勝陣斯亦安中不忘危また古  
き俳諧發句お竹馬お乗り小篠の書むし續山井おはねちらす篠ハ雪の竹馬哉(如貞)松江重頼懐子の集を  
撰万治三年卒業して若竹の馬つれやみな懐子猶あまたあるべし田樂の鷺足ハ一本なり又行人の鳥足とい  
ふハ高足駄なり(古くハ鐵おて鳥の足の如く作りし故此名あり)

○保元物語爲義の罪名定むる處長徳比花山法皇紅の袴をつぎのべさせて奉り高あしふめされ築垣お御  
腰を懸させ給ひよなノ遊事ぞありしをとあり按ずるに此をけ物のまね遊ばれしと云とハハの御門  
御番をよくおをばされてさやうのさまうつさせ給ひしよし大うみみ見えたるをしり誤りつたへたるな  
しるべ



○高足ハ洛陽田樂記ハ高足一足なほいひ又古事談永長大田樂に一足とありて其下ハ又高足とあるにても高あしハ二本なると知べし前の田樂の條ハあれば合せみべし

○列子ハ以双枝長倍其身屬其腰並趨並馳弄七劍迭而躍之五劍常在空中云々口義云双枝屬於腰今人所爲接脚之戲是也因樹屋書影云双枝屬足即今端高踞之戲也高踞之戲習于着履す々而上長倍身矣亦能弄刀劍等○又馬貝の戲ハ是を戲場ハて所作とふえたりし始ハ九代ハ市村羽左衛門明和二年乙酉の顔見せふえたるが始なりさりながらその戲ハ古くよりありしなるべけれど詳ならず篋絨輪編珍とんすを狎の首玉黒駒でなし貝の駒ハ召領(鈔同)又義山後覺(此書文祿五年の跋あり五の卷)明智光秀が信長を弑せし頃織田源五郎安土へ逃奔れる事を謠み作り童共貝がらみ綱付て遊びハ是をうたひしなりといへり(童謡ハ一時の事なれ共其の遊びハ常ふえたる事とみゆ)こハ馬介の事とたしうハ聞えず(今鍋杖のこハ介を貫き集めて打鳴するのあれと綱付るとあるあうないす又今も京師ハハ大なるささこを緒み貫き弄ふ故これを錢介と云ふ

○あら野集次第ハハ暖ふなる(冬文)春の朝赤貝ときてありく兒(舟泉)

○鳩車ハ潜確類書云鳩車高二寸二分長三寸輪各二寸二分狀鳩鳩形置兩輪間輪行百ハ而ノ眼狀鳩從之其禽背負一子有紐置之前以貫繩蓋繫維之所也按鳩鳩之詩以況母道均一故象其子以附之因以爲兒童戲若杜氏幽求子所謂兒年五歲有鳩車之樂七歲有竹馬之歡者是也こハふるき手遊とみえて官遊紀聞ハ古器之名則有鐘鼎云々鳩車提梁云々之屬なほいへりこハふるき書ハハ直幹申文の卷ものハ童の鳩車をいひとこるとうけりまた博古圖ハハ漢と六朝との鳩車の圖をのせて曰按鳩鳩之詩以況母道均一云々前と同文を載

たり

○べうかうハ大鏡の五卷花山院修繪のとをす處ハて修えあをべしたりしさまけうあり云々たらんなどの皮を男のをよびとふいれてめかううえとておとせばうはあうめてゆえうおちたるかたとありめうかうハ目眩うハや今いふべうハうなり其義ハ指めて目皮の下をひきて赤き處をいさすわなれば目赤うの訛ともいふべけれど非あり後世ハ物を請ふを否と云に目の皮を指めて引てベカともベイともいふされとも近時よりのともあらず半井卜善落髮千句くれもせぬ花一枝を所望してのういてみればべいハ紅梅是くれもせずべうハうえたるなり正三道人の因果物語(三町の旦那べう犬をつれて来れりどありべう狗ハ其面めうハうえたらんやうお目の赤き犬なるべし

○續山井(寛文七年撰)折る人ハべうかうといへいぬさくら(友靜)此句上にいへるべう犬をいへり又後撰夷曲集所望する一えをくれぬのみならずこの目むきつハあべう紅梅(正友)

○見聞集の跋ハ或時ハ顔をえうめてかやうしとおとせども問やせず又籠耳といふ草子ハ小兒の啼を止る時むくりこくり鬼が來るといふと後宇多院弘安四年北條時宗が執權のとき元の世祖せめ來る元ハ蒙古なれば鬼がくるとハ夷賊を云なり蒙古國裏といふとのいひ誤りなり(筠庭云此說ハろし蒙古萬句麗の二賊をいふなり吾吟我集ハ鬼ぐるみわがそまなひて手の皮をむくりこくりと身ハ成あけり)顔をえうめてかこじといふハ大和國元興寺の鬼の事本朝文粹ハ見えたり又手をくみ顔あわて手々甲といひて小兒をおとす事もあり予が幼き時乳母ともが姑獲鳥が來るといへば身あしみて恐ろしき夜多うりし云々あり行風ハ古今夷曲集の序土佐の手々甲ハ大和の元興寺といへりさてこれらの手々甲ハ即大鏡のめうハうなるハ籠耳



草子ふ手をくみ顔あてとあるふてあるし又土佐といふハ彼處に元興寺の如き古事あるふもあらず唯邊鄙の國なれば鬼あるやういひ傳へしならん（おもふ目録をみてさる戯れする事もあれば元興といひしやもと手をあてしとされば手々甲を書たりと見ゆ）今も土佐國の小兒手々甲といふことをするのいたく違へり人をあどすわさあつて小兒集り互ふ手をくみ合せ手の甲を互ふ打ながら向ひ河原でかわらけ焼ハ五皿六皿七皿八皿八皿めにくれてづでんとつさりそれこそ鬼よ饒着て笠きて来るものガ鬼よとこれをいひつゝ手の甲を打なりその終ゝあたる者を鬼と定むるいづくにてもする鬼定めなり（思ふ皿かたへの化もの、謠は是より出たる諸國里人談ふ世ふ知とまろの皿屋敷のことをいひて其古井の跡廻町の内ふあり又雲州も播州もあり何れ一所異なる所あらんと云り今も藩町さらやしきと云ふハ播州とまがひ易し必誤りあるとあるし本よりさらやしきハ家居もなきさら地屋敷を云はれふ附會して皿を破りし女の怪談を設しなるべし因ふ云これとらうへの物がたりふて然も靈驗なるべし加藤左馬介嘉明南京焼の皿十枚秘藏なりしを近く召仕ふもの取落して破りければ恐れてこもり居る由を聞て呼出しあやまちハ誰もあるもの也苦しうらす破れ残りたる皿を持來れどて自ら悉く打破此皿残りたらんに何の年何某が破りしと其者の名もいんとよろらす我毛頭怒りてかくするハ非ずとて其後ハ器物を愛せられずとやハ後撰夷曲集節分の豆なやうと名付子ハそれこそ鬼をうなばうしなれハ（ハ州池田氏は誰）手々甲ハ名のみふして其實を失へり手々甲の如く聞ゆれどもさあらず是ハてんううをかくいへるなりてんううハ手業なるべしててんううといへハ松の葉永閑ふしくとんくといふ一休あけハちけいあんでがてんううとわり又物なきを否とてうけがぬふもべうかうするといわり

○次ハ籠耳草子の姑獲鳥のと和名抄ハ孕婦をウメと訓す産婦の義なり今昔物語ハ生兒を抱て人を訛うするのをうふめといふ其義同し本草綱目云姑獲鳥產婦所化陰隱爲妖とあり本草啓蒙ハ一名釣星鬼（外竊秘要）夜遊鳥（潜確類書）中國あてハうふめといふもの夜中飛行て小兒を害すと云て夜中ハ小兒を外に出さず此鳥の鳴聲兒の啼ガ如しといふ然れどもその形狀ハ詳ならず今小兒の衣服を夜中外ふ於て乾すことを禁ずといふハ此鳥と畏ると京師あても傳へいふといへり（籠耳ハ形鳥に似たり七八月の間よなよな出て鳴といへり玄中記ハ是產婦死後化作故胸胸有兩乳喜取人子養爲己子凡有小兒家不可夜露衣物此鳥夜飛以血點之爲誌兒輒病驚癇及疳疾謂之無羣瘡也荆州多有之亦謂之鬼鳥周禮庭氏以救日之弓救月之矢射鬼鳥即此也これらの小説を出所あててこゝもいひだしものと見ゆその實否ハ論するふ足りず）北戸録ハ陳藏器引五行書除手爪埋之戸内恐爲此鳥所得其備調即姑獲鳥也嶺表錄異もふの説あり七草爪をとるとこの故なり世説故事苑ハ七種を拙事文類聚ハ歲時記を引て云正月七日多鬼車鳥度家ト拙門打戸滅燈燭禳之和俗七種菜ヲ打ツ唱ハ唐土鳥日本の鳥渡らぬ先ふと云るハ此鬼車鳥を忌意なり板を打鳴すハ鬼車鳥不止やうハ禳也星の名て天鳥を逐ふ事ハ周禮秋官ハ見えたり桐火桶と云ものハ正月七日七草ハ七星なりなどいへるも周禮ハ本つけるなるべし

○も、ガハ和名抄ハ鷺風を毛美と訓す是なり又ハサ、ヒ又モ、ガども有り是も本州啓蒙ハモ、（十州）モマ（同州薩州）ソハラシキ（西國）ノナスマ（畿内）ハンドリ。スレデ（飛州）城州山中ハ産せず他國深山ハ多し古歌ハ春日山高岡山嶺州の三國山等ハ詠せり今も春日山ハ多し形ハ猫ハ似て瘡紫褐色大尾身より長し腹下黄色喙頰雜白色四脚肉翅尾ハ連る翅を開けハ傘を張るガ如し常ハ木梢ハ穴居す夜出て能飛然

六



れ共只高きより飛下るのみ高ふ上ると能はずとあり（筈庭云もいんぢいといふ物お見えす今尾の生たるものをすべてえういふ百歳の老父といふとみや又いふものうとどかのかいとなすらへそれおむうへてもいふといふは勝りておそろしきをいふみや）

目くらへ 耳引うけ かけくら すみたふれ 紙つけ合 馬のり（といま）肩くるま 手車 道中 籠 うなきの瀬のり（いも虫、鬼の留主のせんたく） 目白押 つばな板（まつね）

長門本平家物語（九）清盛夢み體を見る處たとへ人の目くらへをするやうふたりひみまたいきもせむとたどふらまへてぞいける太平記（十）箱根竹の下合戦の條うやうふ目くらへして鎌倉集り居てうなふまじ云々異制庭訓お遊戯を舉たる處目比頭引膝挟み指引腕推指搦この目比ひふらめくら也指引へ今見及べぬやうなれど前條いへる指ッまりなるべし但しものと勝負するまざるを後ふあらぬ事となりしもの歟

○耳引うけあつていひ笑山が色道大鏡ふ常のかるたをうたふ賭を定めすしての不興なり但し定むる共耳引うけ敷竹篋をよろしとすべしとあり耳引あけい類たすきの類なるべし竹篋へ指あつていもありそれい指の力を顯へすといふて拳螺のふたなとを打破るなり

○江戸ふてかけくらといふ枕双紙藏人巡符の事をいふ處昔の藏人のことしの春よりこそなきたちけれ今の世ふへとしりくらをなむする望一后千句尻をつほる余所め恥かしおそらくといひしもまくる走くら後世俗お是を走りくらと云ふ古今夷曲集お（行風）帆をうけてひいふうみつの浦風へ走りくらや足とやき舟其角が花摘集樂車が句「野路の月をしりくらふ息されてなど見

○すみたふれ安布夏加須に拭ふ紙を手ふ持泣けうりすみたふれみや負て腹たつ今戯れとお負たるもの墨をぬるこれにやあらん

○又額ふ細き紙を唾あてつけぬれさる處目のあたり迄下たるを息をもて吹落すあり元祿頃の繪ふうやうの童戯多く集め書たる物あり其内ふも此足さ見えす猶近き頃の戯事う（或人云ふ英一蝶が書あり）續山井（寛文七年湖春撰）短冊紙つけ合う花のさき（たんばすて）と云句ありこれ鼻の先お紙をつけ合ふ戯あよりて作るるなるべし

○次でふ云ふのころ小兒走り行つアヤリヤンリウといへりヤリヤと云とをかさねてリヤンと云より拳をうつ詞おなしてリウとウといひ出しやうなれどもさああらすリウといふ物を振物を打つなど勢ひを云物類稱呼お尾張あてへ走る時など猶豫なくけいまきとをおりくと云とあるこれなり又此ごろ富有なる人をいふにリウとして云とはやれりこれ亦同じ詞ながら意うつりたり

○江戸近江平井村あたりの小兒の遊び馬を追ふ學びあり一人馬となるもの繩をもて首より背にかけて結び兩手お杖をつき馬の足かたどる一人其つなを牽て行なり

○馬のり榮花物語（木綿四手）おといも消入ぬ計ふてふし給へるみや一のみやれいましておどれきよく馬ふせむとおこし奉らせ給へばわれあもあらずあがり給てたうばひしてひまおのせたまつり給てありうせ給へば一のみやまいよりうごぬむなとてゆあふさしてとくくと打奉らせ給（おとい）堀川左大臣顯光公なり其ゆ女小一條院の女御ふて其子一の宮中務卿敦貞とすおとい一のみやのゆえうとなり此時小一條院御堂殿の女あかひ給へばなり）おさな遊びの今昔も賤もかへらぬ



さまざまが如し又猿樂狂言(外五十番)手車と云ふ乗物とも馬とも思ひ召身ともれもいれて下されいどあ  
るの下お這て負ふあゝあらずよの常のこく背ふ負ふなりそれをも馬といふ今もまくり今とい馬くとい  
ふと東海道名所記のみうぎより五畿七道へはつうひをくださるゝ時出しける傳馬を驛馬とす驛馬とだ  
あいへば人おそれてたのきけり今の世までもいまいといへば道行人もかたへらへ立のく此事よ  
かいひ傳へたる言葉とやといへり日本紀ふ驛を訓り早馬の急辭なりいとやと通す傳をハイトとよめる  
もこの義なり後世へ傳馬とのみいへりとぞ好古小録ふ驛傳古函の圖を載俳諧錦繡綴ふ宴りふさうなのな  
きハ比興なる(肅山)迷惑ながら馬なる袖(彫案)簾絨輪お若子の抱守り袴きた馬といふ句もあり  
○肩くるまハ古くのかたくひといひたり義經記ふ奥州平泉寺見物の條ねんいも見たわとてめいよの兒わ  
りそなかりて出たせわう大しゆのかたくひのりてぞ來りける近くハ万治二年印本私可多咄お江戸後  
原の事をいふ處あどよりかふるハ肩くまあてきたる云くくらべましより足けがみの肩くまハ君ならずし  
てたれうわぐべき

○又今童の戯お二人して左右の手を組合せ其うへふまた一人を乗しめふりやたがてんぐるまどをやす上  
おも引る狂歌ふ手車あり又伽羅女といふ草子ふ或ものゝ着りをいふ處すぐれし艶女廿五人此女の役めふ  
ハ二六時中の差別なく隠居の仰お隨ひ皆立より手車云ふ又崎人傳ふ享保のはじめ手車といふ物賣  
翁あり糸もて廻してこれいたがれじやといへばこれハおれがのじやとまたへて童部買て遊ぶとありうゝ  
れば彼手車のことやしこまされより出しおや正章獨吟千句ふ少人どもの袖み集り手車の果ての後のどい  
めぐり手車の手遊ハ今もあり戸車の中のくひれたるやうの物を土よて作り中み糸を結つけ巻て下れば廻

りて上り下りするものなり

○又幼き者を背お負て道中駕籠やうらかごやいさよりもせりハ安いなとこやそとありもどり駕籠ハ乗る  
價のやすきハ理りなれどさふハあらず安いなを早いなどもいへりこれ空うごといふあうなへり

○うなぎの瀬登り東海道名所記ふうなぎハ川瀬おのぼるものなれば登魚梁といふ物あてとるなりみやこ  
がたみてハいとけなき子どものあまた集りて帶ふとりつきてながくならひたるせなうの上を一人のぼり  
てとひわりくをうなぎの瀬のぼりと名づけてたハふれどす(此戯今も他國ハありもやせん江戸ハ似  
るとあれどもこの名殘よやえらず古のさまお帶ふとり付くゝえてかみ居てありく其こやしごといふ芋む  
しころくハひやうたんがつくりこと云つゝまばらくありきて先お立たるものあどのくのせん次郎とた  
呼ハ最後お居たるものはなれ出て前よ來て何用でござるといふ呼たる者手前今迄何えて居た答棚うら落  
たばた餅を食て居たられならバ雨がふるう鎗がふるう見てこよといへば見お行まねして雨がふる鎗がふ  
ると問まゝふそむうす答ふ其時前がよいう後がよいうといへハ前がよいといふそれならバ前お居よてど  
それを先の第一番お居らしむさて初めの如くをやし歩むなりとやしとハ手遊の芋虫より出しなるべし此  
外おもおなしやうなるとあり二人前と後とふなりて立並ひ手をひき合その手を高く舉いわしこいゝま  
ゝくハまよといふあまたの子供その引合たる手の袖下をくゝり振る時手を引たる者潜りよ來る者のうた  
お向たる者くゝる者の尻をうつくゝる者ハうたれじとするなり又各着る物のつまを兩手おもちて洗ふま  
ねびして鬼せの留守お洗濯まよといひつゝ居れば鬼ふなりたる者糊を賣ひといふ時着ものゝつまをうゝ  
けたるふうくる鬼ひら手して力を入そのつま持たるを打拂ふ拂ひ落されたるハ鬼あうりてなるなり鬼



の留守の洗濯といふこと見さより出たる戯あり

○目まろかし鷹筑波集椿原ふ油おしする目白うな懷子(五)おしあひてめならふ籠の目白哉大倭本草ふ編  
眼兒常熟縣志曰最小而巧今按るふめまろの目ぶち籠るが如し故に繡眼と名く其羽色青褐色青ばどの色あ  
似たり枝上ふて同類と押合といへり脊の色雌雄とも同じ但腹の毛の褐色なるは雄めて黄色なるは雌な  
り雄へ鳴雌へ鳴ず並ひ居て押合ふものなり是を學びて小童おしあふふ中なる者推出さるれば端ふゆきて  
又中なる者を押めざるが押合もその如くなり(諺ふ人といふめまろといふは右のとあらず人のうへ  
いも目代ありとなり清盛が千人禿などの類壁あ耳ありといふも同じ心なるを目代を付置て人といふと  
おもへる説もあれどさにはあるべうらす)

○つばなぬこく鬼との一種ふ鬼ふなりたるを山のおこんと名付さうひつれて下あういみどもくつば  
なぬこくといひつゝつばなぬく學ひをしててお鬼あひうひ人さし指と大指にて輪を作り其内より覗  
きみて是なふと問へば答てはうしの玉といふとみな逃走るを鬼追うけて捕ふるなり此戯へ即きつねの窓  
なり(別條あり併せみへし)白茅和名あすといふ春新苗出る時葉の中ふ花を包みてありそれを茅針とも  
茅箭ともいふ即つばななり小兒これを採て嫩穂を出して食ふ綱目の集解も益小兒といへり夏ふ至れば  
穂長く出白き絮あり(信實朝臣百首いとおしやまたかふるなるうないせもやけ野ふあまたつばなぬくな  
り)この絮ほくちとなす古き俳諧あ芝居せしとあらずへる袖といふ句ふおさなきう打つれ立てぬく茅  
花とあり是を採學ひの戯狐のとある其よしありすの花出て絮となりぬるを狐といへり俳諧懷子(一)迷ひ  
されぬく野の狐つばななり又(十)狐の多き芝原の中たくるまでぬうぬつばなのはいなしや茅の花のた

けて狐となる迄ぬうさうしを惜むるべしかゝるゝとあるよりて此戯へ起りしとまらる又綿ふ狐のまじ  
りたるといふとも有それハ色の黄なるが雜りたるなりこれも久しくいひきたると見え古きおどしの  
咄にあり又産業袋(五)見たはうしの條出来合はうちへ唐綿を包みふして上綿ぱうりをきせ作る日あ透  
してみれば包さう真わたぱうり歟よくまれみゆるものなり泥つね綿とい右の包みのとなるよし俳諧江戸  
枝折狐が付て越後屋の損

○手あて豆を作るときふけふの物語(下)長老さまへよ六太夫どの、おうたゆみ舞ふさせん豆をもち  
て出こしある新發知長老さまへすやうよ六太夫殿のゆ内義のまれを持て参りいといふて指ふてもの  
を作りゆ目ふうくる長老ゆらんじてさてくふくいやつおや人のみる所あてさやうなるををするもの歟  
とあれバ此と近時よりするあわらず

○爪をくぐりていど古し源氏物語(竹川)玉うつら侍従の君して薫和琴をすゝめて彈まひる所あま  
えてつめくふべきにもあられぬをと思て云ふ注あそづしくせんといふあらせと薫の必なりとあり童のこ  
ふかみ爪くふといふも是なり又小兒の足やくといふ正章が千句「俄ふも七社の神興ふりたて、待賢門  
の前ふわやたく」たぐい痛くの客と義くらうがはしさをこたくといふたくと同じいたくわやめくなり  
このわやたくの足やくとなりしにや又鷹筑波あわらへへのすうすもきうすもさうせやあいふてみるもあ  
ふなき松の木のはりといへるハ脂のねりてもあつうひうたきふたとへていふう此をヤニヤヤとい  
へり延宝七年俳諧富士石いち高敷珠西瓜のたねやふちや坊ヤニヤ坊とい小兒のヤニふなり西瓜の  
たねの粘るふたとふそのたねを敷珠ふよへたるハ坊を法師の如くいへるなりやにちや今ハやんちやん



と云是なり

○今江戸にていふ地踏なりこれをも小兒のいひしとみ非ず雨夜三杯機嫌悪左禮會の大盛催  
亂舞障者采々官押者邪々袴又物類稱呼あまくむといふとを江戸にてはよりむといふまたいふといふを  
東國にてまじり又さうむと云ふ房纏ふてかなづうと云うなづうとハ寄居虫のとなりかのれが家より外へ  
出るとわたす内にばかり居ふたとへたり遠江にてまゐると云ひ關西にてわある越後にてけすむと云ふ  
万葉ふつのふくれあまひひけんとよめまきひひまきむといふあなじと有とみゆ接るあまきむ  
ハ即ちこむて尻込なりされを万葉のまきひといふ詞と同じとするハ非なり右の内やあるハやあひふ  
てまきむとハ別なり

卯槌(卯杖剛卯) 打毬 毬杖 (ふりく) 飾り花 葉玉(十二月うけ物) 菖蒲胃(菖蒲綴、削りう  
けの胃、まやうぶ刀、胃人形) 小兒山伏のまねひ

毬杖ふりくの遊ハ打毬より起る但しその杖ハ曲杖とて毬杖ふりくハ異なりよりておもふ毬杖ふり  
くハの形ハ印槌より出たるものとおもひる印槌ハ枕双紙お正月ついたち齋院より后宮へ移る來る處移る  
わけさせ給へれば五すばりなる卯槌二ツをうづゑのまきまきうしら包みなどして山たちばなひうげなど  
うつくしげふりさうて云々卯槌のうしら包みたる小き紙お山とよむをのひきききききききききききき  
つゑのおとふ有ける又同双紙正月十日をいといくらう云々の條桃の木おわらハの登りすハえを切るふ  
女の童のそれを請ふ處うつち木のようらんきとておみせこハあめすなど云て云々源氏物語(浮舟)正月  
初に宇治より匂宮の若君のおまへとてとある處卯づちかうしうつれハなりける人のまわきと見えた

りまたふりふ山たちばな作りてつらぬきとへたる枝ふまたふりぬ物ハあれど君がためふき心あまつ  
とまらなむ

○和名抄ハ板極をまたふりと訓り樹枝といふなり花鳥餘情ハ木の枝ふ山たちばなを造り花ふして卯槌を  
枝ふつらぬきたるなりといへり江次第(二)絲所進卯槌藏人取之結付晝御帳懸角柱副立細木爲柱槌末出五  
尺計可用桃木又四角可削近代ハ也失歟とおもふ卯槌と卯槌ハ長短ふよりて名のうけるふやおなじ程  
の物なり延喜兵衛尉式云々其御杖楨三束(一株爲束)木瓜三束比々良木二束(中畧)梅木三束椿木六束な  
とみゆ夫木集あ色うへぬときハの峯の玉椿君う八千代の卯杖ふさる西宮記卯杖春宮坊立案(蘇芳木)云  
々作物所供御杖四枚作御生氣方物形置御上云々持統天皇三年正月乙卯大學寮獻八十枚漢宮儀云正月卯  
日以桃枝作剛卯杖獻鬼これをも漢家の剛卯ふならひ給へるものなり御生氣の方の物形を作り風流の飾物  
さへ付るハ後のとなり源氏の孟津抄ハ剛卯はまを作り物めて其上あひこはの中ハ御生氣の方の獸を作りて  
卯杖ハあはしむたとへハ生氣束ふあらハ兎南ふあらハ馬なるべし臺盤所お置る新古今集後冷泉院おさな  
くれいしむしける時卯杖の松を人の子ふ給へせけるふよみ侍りける(大貳三位)相生のをしはの山の小松  
原今より千代のうけをまたなん

○剛卯ハたハ漢家のまじなひ物なり天祿識餘説文穀説大剛卯以逐鬼也廣韻剛卯又謂之大堅以辟邪也漢書  
王莽傳云劉之爲字卯金刀也其法剛卯莫以爲佩注剛卯以正月卯日作長三寸廣一寸四分式或用玉或用金當中  
穿作孔以綵絲貫其底如冠纓頭刻其上而作兩行書北堂書抄云漢家以五月五日用朱索連五色剛卯止惡祲ま  
た沈約宋書(十四禮志)舊時歲旦當設葦菱桃梗磔雞於宮及寺門以禳惡氣云々桃卯本漢所以輔卯金又宣魏所



除也云々宋皆省而諸郡縣此禮往々猶存とありうれば此にいさふ用のなき物より熟田の神事より卯杖舞をなすいつの程より有とあり知らず搦尻正月十一日熟田の宮前みて宮人卯杖舞を奏し倍從竹川をうたふ尾張氏踏舞の頌を唱へて高巾子の神人鼓を振り侍るさまいとく昔おほえたる云いへりその歌曲み杖の舞獅子舞など委しくえたるしれども略之ざるを或人漢土の碌碌といへる農器より出たりといへるはうけかたし形の似たりとしてこにいまだ用ひざる物を漢籍より見出て兒童の戯戯み作るべきやうなし野守鏡ありうこのことをいふいまだよくまいらぬさみなけあくれべふりくとして落るとありこへたい投る時の形容の詞なり

○打毬ハ騎馬にてまり蹴むさふて唐の代の戯なるを其頃こゝも盛ふ行われ万葉集(六)四年丁卯春正月云々有神龜四年正月親王子及諸臣子等集於春日野而作打毬之樂其日忽天陰雨雷電此時宮中無侍從及侍衛勅行刑罰皆散禁於授刀寮而安不得出道路云々といへるとあり散禁とハ禁足せらるゝなり續日本後紀仁明天皇承和元年九月戊午亦御武德殿令四衛府馳獵種々馬藝及打毬之態など見えたり又舞樂ハ打毬樂あり節會の馬藝おこるゝ時この様を奏すとむ平家物語(十二)お後鳥羽院雅孝時打毬の玉を愛させ給ふ故文覺が毬打の冠者とのしり申せし事あり是を正月のもてあそびなりしよし袖中抄ハ十節録といふ物を引て黃帝取車尤頭毬之今毬杖是也以彼例漢土年始用件事國中無凶事仍日本國學其例年始行毬杖云々と出たりされどこゝたしうならぬ俗説なり源平盛衰記義經記等ハ毬杖の杖を人の首みなうらへたることのみゆるゝこの俗説より作りし事とあるる事物紀原をみるハ宋朝會要ハ毬杖非古蓋唐世尙之以資玩樂とあるハ明らうなり滑稽雜談ハ俗ハ振々と稱して毬を拂ふもの有毬杖と云者にて杖のさき付るもの

なり當代ハ古來の模倣ハ變り二三歳の幼兒ハ少き毬打を紙上又ハ薄板ハ帖し鶴龜松竹など作て是を毬打ハ限るやうハ稱し其餘ハ玉振と各別ハ呼ぶ大なる非也いづれも木丁と稱すべしと云々今玉振と云ハ即昔よりの毬打みて腰物の目貫線頭の繪様又ハ諸具の時繪もあり其形狀玉ハ大戸ハ付る戸車の如く寶蓋の内の七寶と云物の如く彩る振ハ木を八角ハ削り兩端を細く中ふくらふして細き方上の方左右ハ木瓜形の穴を穿ち此處ハ前件ハ云處の玉を付て惣体金箔にてたゞ其上ハ鶴龜松竹尉姥等の繪を彩色ハするなり用る時ハ左右の玉を取はなし別ふして是を擲つ玉とし八角の木の木瓜形の穴ハ竹杖木杖の如き棒を貫き柄として是を玉を打毬杖と略してハ皆已ハ得物を用(已上)と云へり玉の形なども古今異なれども此説の如く毬打ふりハ一物なり柄をさし緒を付るも用るものハ好ふよるべし(正徳の頃ハ古製うつりて今の体どなれハバかく云リ)或ハ帶などを用る處ハける畫ありふりくど云とハ今ふりくど云ハ言と同一射藝ハ弓勢強弱を爭ふ爲ふりくど云的ありうら板を丸くし白革にて縫くハ中ハ毛を入てふくらうす安齋の夏卿射の部ハふりくど本式ハなきことなり是ハ圓物より出たるとなりふりくどハ上ハのうり網を付てつり置故矢あたれハ的をね上り上の横申ハ巻つくなり其巻數多きをよしとすつよく巻つめたるをも數ハ入るなりといへり又太刀の柄の下緒のおもりの金ものをふりくど云いづれも此斷具ハよりての名なるべし室町家のとをかける年中定例記と云書ハ正月の條ハ今日毬打二玉二金まいるなりとあり沙石集(八)天狗の物語の處空より足ある釜ふりくどとして落つ貞徳ハ油渣ハあふなくもありめでたくもあり正月ハありて町ハ玉うちて又掠梨一雪ハ獨吟百韵塵吹をらふ風ハ帶ハふりくどもいたで琥珀の玉打ハ春ハ北野へおじやれ松ばら(寛文元年の作なり)帶などふて玉うつをいへり



○大麻木やり歌(打もの、内)ふり／＼あかい玉とわりかい玉とへかひ遣るうい取なぞの詞と同くかい打玉といへるなるべし玉振るといへるの常なりまた玉毬打ともいへり元隣が離身のうへ(明暦二年卷二上畧)かざりとらへの玉毬打ふり／＼ふりし佐保姫云々又ふり／＼きつちよともいへり松の葉京童といふ平大夫節み先正月の云々ふり／＼きつちよを手ふふれて玉をうち出のこま弓やなどありふり／＼もとより毬打なれと紐を付て振る故ふり／＼といふのみ今製の毬打の只祝儀の手遊なり順也が俳諧五節句に破弓玉毬打養君乳母祝儀遣す又いねねと板女の子へ遣す是とやあのならいしなり乳母なきに祖父祖母遣すと有今も京師の小兒生れて初めての正月母の親里より毬打を贈る(女子ふも贈るの今に全く所用もなきうさり物故なり)次の年正月の男子にふり／＼女子ふ飾り花をおくるとなん此事古風をまもる者まれ／＼する事なりといへりされど飾花へもと五月の節物なり下總の千葉などあて玉をきると云て今も弄ぶ玉のけやきなどのかた木を丸さ宜しき程あるを小口より挽きりて用ゆ杖の木も竹も末の處を少し撞木の形を作るをよしとす凡二十間ばかりも隔て玉を轉しやりて打するなり玉の初め地お打つくれバ廻りて走りゆく廿間もゆく間ふハ三四五度も地お付てハ飛上り／＼してゆくものなりあなたも居る者幾人ふても并ひ皆彼杖をかまへて玉の来るを待てもと來し方へ打返す力まかせふるとなれば此時向ひ居る者の面などよ中りてあやまち有り又江戸近き逆さ井などおもこれを見たりこれをはんまを廻ると云習へりこハ濱弓のはまとな名のまがへるなり

○枕の双紙(五月五日の條)とくま人ハさうふのさしぐしさしものいみつけなぞしてさま／＼からさぬうさみなうさねおかしき折枝ともむらさきのくみしてむすびつけなどしたるめづらまういふべきとならね

といとおかし云々つちありくわらへべのほど／＼ふつけていみしまわしたるとつねふたもをまもり人あみくらべえもいとすけうありと思ひたるををへたることねりわらへなどおひきとられてなくもかうしむらさきの紙はあふちの花ををかみあさうふの葉ほそうまきてひきゆひ又白き紙をねあしてゆひたるもおかしと有わうき女房ちをなぞ衣服お糸を紙花ふてあふちあやめなどを付るなり揉るも拾芥抄お證類本草を引て是日俗人取柳葉佩之避惡氣とあるふよりてあふちを帶るなるべし古くより柳をあふちとすれども誤てあふちハ棟字ふあたり柳ハちやんちんといふ木なり同双紙春曙抄卷二の頭書おくすだま雲圖抄おの藥圭とうけり河海抄お續命縷靈絲綵絲なぞいへりみなくすだまの体なりと云々今女わらへ端午おもてあそぶかざり花なりといへり雍州府志藥玉の條下お端午のたとを云て以彩絲作花枝貼白紙上掛之於女兒背後是謂藥玉古以丸藥交其間避穢氣長命縷之類也とあり是即かざり花なりおもふあその形の兒女子のえりかけとて花など縫たる物のあるそれや似ふらん後おの其用もなく只もてあそび物とするよりかざり花なぞハ呼るなるべし

○さつきの玉夫木抄(七)民部卿爲家花の色とさ月の玉ふぬきとめてわづをとめの姿をぞみる

○滑稽も此日よもぎ菖蒲を用ると同じ松亭行記(重午の日還駕の處ふ)都城人家戸懸赤靈符菖蒲艾葉

○藥玉の河海抄お抄記曰延喜十三年五月五日丙午絲所供奉藥玉如常撤去年九日茶莢以藥玉懸替着御柱前例也枕双紙ふくすだまハ菊のをりまであるべきあやあらんされどそれのみないを引とりて物ゆひなどしてあそしもしとみえたり然らバ重陽の藥玉を撤し茶莢を懸ると知べし懸ものお茶莢袋二様あり古製なるやあらす茶莢の藥種の茶莢莢ふて食用の胡頹子おのあらす雲州消息(一名明衡往來)云今朝自或所給



藥玉一流作以百草之花貫以五色之縷撰草虫形極其花房云々みゆれば古くより虚飾多うり近世堂上も十二月掛物として毎月ふ懸るものあり皆藥玉の如く五色の糸を垂て頭の方其月々の草木の花また鳥虫などを作りものにして付たり古代なき物ともなり藥玉をもどおして作り出しなるべし(或云これらの玩物大抵後水尾院東福門院の意巧なりとぞ)年中故事要言民間も五月五日女童の翫物お色の作り花を糸につけ紙お張などして用るの藥玉と下お習てゐる事なりといふ

○衣服おの袂おつけし事前ふも見えたり又爲兼卿家集菖蒲露「引のこすあやめの草の袂ふもさ月の玉のかくるえら露と有

○菖蒲宵の辨内侍日記建長四年五月五日の條女房たちみえやうぶとせさせ花ども(脱文)あやめかつらうけへけしきほと云々辨内侍「黒かみのあやめいなきをひたひなるかふとい(脱文)と人やみるらん(此時後深草院は年十四ふやつとをひ奉る女房ふせさせ給ふなり)おれを増鏡ふ所よりほうぶとの花くす玉など色々多くまいれり朝餉ふて人々おれうれひきまきりなとずるふ三條大納言公親の奉れる根お露おきたる蓬の中お深といふ文字をひすひたる糸のさまもなよひうみいとえひありて見ゆるを云々あるかふとの花と後世の宵人形の如く紙おて宵を造り其上ふさまの花をかたどり作れる物とおもへるハ非なるべしかふとい云ともそれ程ふ頭ふかうふるべき物ふもあらずたいかんさしのやうにやあらん女房式正の時ハ垂髪して頂のうへハ髪を瘤の如く束ねて是をうぶと名く其かふお銀子をさすくするを髪上げといふとぞこの如くかふとの花ハ彼うぶとふ捕ひ花なるべし弁内侍の日記なるあやめ宵も同じかるべし此所菖蒲を用る事古き例とみゆ

○續日本紀天平十九年五月庚辰太上天皇詔曰昔者五日之節常用菖蒲爲綴比來停此事從今而後非菖蒲綴者勿入宮中と有る是なり又端午お諸衛府甲宵を着ると延喜彈正式お見えたり後ふ兒童のもてあそぶあやめ宵ハその始園大曆文和四年五月五日條お今日加茂社競馬神事如例彼是云今年天魔流行云々童等結構菖蒲甲即學合戰所々催其興童部親類已下成人武士等相交刃傷殺害所々數輩云々誠不可說事とぞとえたり是印地の戯なり幟を立木刀をもてあそぶ事もこの遺意なり諸社根元記藤森縁起毎年五月五日祭禮神幸之時在地之神人等鎧甲宵帶弓箭列騎馬自爾以降洛中洛外至邊土遠國小男童兒帶作大刀刀等以菖蒲飾之稱菖蒲甲是則當社祭禮供奉行裝也といへれどもさばうりあはらず寛永癸卯帳ふけふさすハ印地のまやうぶ刀うな雄長老百首さしさまふ軒のをそひの名おてハ菖蒲刀のこをれおけり紅梅千句も持もさるも輕き番やもむん具足五月五日もやハくれおけり

○洛陽集お割バさみいづれあやめぞ蓬とぞ(行正)中古風俗志ふ享保のころまでハ所々の廣小路へ童集り菖蒲おて大きなふとき三ッ打の繩をおしらへ或ハ長竿等を持出往來の子供へまやがめくといひて下座をさせもし下座をさせられ打うりなとて使ふつかひしたるハ小桐布など重箱をよとされハうく遊うへりし事などありしが今ハ絶てなしといへりされど子ガ幼き頃までも童共人家の簷なるあやめを竹のわりバさみおて取あつめ三ッ打お組で持あるき他所の子供を見れば此繩おて地を打草履を脱て下座せよと云ふされども下座する童もなく又絶てさするふ及ばず唯かくして遊ぶとなりき今も此戯する處もあるべし

○削りうけの宵ハ俳諧懷子(明暦二年)甲をみれば削りかけなり殊更ふもる鹿耳や馳走ふり(重頼)内田順



也。俳諧五節句(貞享戊辰)大うさ檜物師細工なり人形お武者あり舟あり平家物語の跡有り鹿相なる張貫もありまころお木をつきうんなにて削り短冊の長さやうなるを色く染いくつともなくふらさげるによりて削りうけの甲といひ賣みや又けづりかけあわぬも有り此頃ハ宮殿寺社見法師女さまハの古事どもあり江戸にてハ張良辨慶など名ある武者を只一睨作て張貫くよ弁慶くよと賣り買とハ賣ありうぬ也日本歳時記(貞徳五年板)菖蒲胃太刀等の事をいふ處此とむうしハ厚き紙ハ人形をはり付薄き板を胃の形おこしらへ或ハ蓀の葉ふて馬を作り或ハ木を長刀れ如くおけづりなせして戸外お立侍りし近年ハ風俗美巧をこのみて木をもつて人馬の形をささみ又をりこにして彩色をはせよし或ハ甲胃をさせ劍戟をもたせ戦闘の勢をなさしめ戸外お立侍る是を胃といふ

○鷹筑波集(三)安井正親けづりかけの胃のだしハ鯉節これ彼厚紙ふて作りて胃の上お付たる物をだしといへり江戸にて今神祭のだしといへるものもうへお付たる人物草木何くれの作り物をいふ名なり此句ハ右の作り物と鯉節のだしとをうねていへり又世話盡(三)明暦二年刻夏の胃をのさえむる窓檜物師の軒もあやめの節句ふて是も削りうけといへられ共檜物師といへるにてあるべし

○正保慶安の町ふれふも前より小旗之義絹布一圓仕間敷いと仰付らるゝ万治二年四月十六日毎年如す觸ハ五月節句の甲結構ふ仕間敷勿論作りもの作り花系類金物金銀の箔漆ふつけ商賈堅仕まじくいいうも鹿相なる人形一つ二つより外付申まじくハ寛文七年十一月朔日町觸の内五月のもてあそびの甲古へのごどくうふり候やうお拵へ人形ほり物可爲無用但甲に立物ハ不苦みすべて結構ふ不可仕事此頃うさる物をむねとしてうぶられぬ胃を作れるとてゆ今の上り胃といふ物麻を垂たる木の削りうけおかへたるなる

をむねとしてうぶられぬ胃を作れるとてゆ今の上り胃といふ物麻を垂たるハ木の削りうけおかへたるなるべしもうへお付し人形を後ハ別お作るとなりても猶胃人形といふなり 上り甲といふやまどなまわたりへ奉るの義なりひなにも此名ありしとてみゆ類柑子廣蓋を車大路やあうりひな(適山)ひなハ小きものなればなり

○世説故事苑(寶永七年板)胃及人形を造り門戸おけ紙を畫きて門お出すといひ五元集ハ五月雨や傘おつる小人形とハ雨日お傘を其うへよさしかけたるを傘おつると作れるおや又蓀の葉ふて馬を作り戸外お立ど歳時記いへり好色つれハ草七夕のとをいふお百姓ハ麥わらよて馬人形を作りて高き木のうへおけならべまつりとす今も信州松本ふて七夕お町々繩をもて家と家との軒おかけ路を横ざり木ふて人形をいとふるそうお造り紙衣をさせいづくどなくかの繩お吊おくとなり

○越後掇澤わたりふても七月朔日より七日の夕まで家々の軒お繩をひきまへ人形ハすげあて作り五色の紙衣させ大小刀鎗長刀などを竹ふて削り鏝また鎗の鞘等ハかるたなどの厚紙をきりて作りすべて大名行列のさまなどうつり吊おき七日の晩方よりて川水お流し捨となむおもふ牛ハ七夕お因われハ靈棚お牛馬手向る事の七夕お移りさて人形なせさまハ吊るとハ端午とまがひたりさりながらこのさまをもて昔の端午のやうもおもハれぬ傘おつるといひしも其をりふて言を設ていひしおあぬふや

○散木集の連歌おをさなきちこのちまき馬をもちたるをみて承源法師ちまき馬ハくひうらさハぞ似たりける(附る人もなしと聞えしうべ)きうりの牛ハ引ちからなしとあり又著聞集(草木部)泰覺法印五月五日人の許へ菖蒲をつりとすとて讀侍りけるわりなくあやめのふちを心さすちまき馬をやひきいたすとて



○あの日小兒山伏の學ひせし事日次紀事(延寶中の撰)以柳木作大小刀是謂菖蒲刀男兒橫之於腰着頭巾偃山伏体むくし物語(享保十八年)六七十年以前までへ五月の初とさんすいかけほら菖蒲刀を賣てありくそれを子供もどめて五月四日子供亥やうぶめて鉢巻しときんをかぶりたすきをかけ菖蒲刀をさしほらを吹ありくといへり俳諧懷子(明暦二年撰卷十)すいかけも頭巾も脱てゆかたひら端午の暮をおしひとらんべ(玖也)これ男兒が山伏の装ひいうめしきを好めるのみふあらず頼光大江山入義經辨慶大塔の宮などの似せ山伏の体をよろこび學ひしなるべしそへ彼胃人形も多く作れ、バなり又小兒のみふもあらずたまゝ試人のこの装ひせしともあり北條五代記お北條家の武士主家没落えて後大家の招きお逢へるが其君の命ふよりて馬上のとたらきをなす時咒巾をうぶりけさをうけたりこれ何の爲なるとをまらす小兒の戯あおなじ北條五代記結城秀康卿北條の舊臣等と扶持せらるゝ内朝倉能登守入道犬也お命じてむくし軍陣のへたらきを學びて見せよとある條犬也つきげの駒お黒糸おどしの鎧を着はし甲の上お頭巾あて白袈裟をかけいぶせき山臥のすがたお出立弓を射鎗をつうへるとありおもふ此者法体なる故をもてうと装へるなるべしそのかみ甲越の兩將みな法師ふて戎服の上おけさ掛たり當時のならひと見ゆ

羽子板(こきのま)下學集(文安元年)羽子板(正月用之)と出たり年中定例記(室町殿の頃の年中行事出し

喜遊笑饒能六下











○額み大字書くと漢土ふも似るとあり博聞類纂(十)小兒類上寫八十字此乃旂檀王押字鬼祟見則廻避とありよりて竊み疑ふ大字もし八十の二字を合せたるふやいづれあも道家の事を學べるなり又この犬の面猫とも人とも見ゆるやうなるも古風なるへし狂言止勸方角の馬の面などの類なり人倫訓蒙圖彙に張振人形所々よ造る張子師犬なりこれをせしめ一切のうたちをあらはし香合等をつくる繪師まれふえぐなり所々住す又ふこのうしら離師これを作りひとなやふうるなり離屋これをもて品く仕立あきなふなりといへり

○ひゝな又ひなともいふ鳥の雛よ准らへて小きものをいふ枕双紙みあれのせんじ五すばりなる殿上わらひのいとおうしけなるを作りてみづらゆひさうなうなるへしとて名りきて奉らせたりけるおともあきらのおはきとどかきたりけるをこをいみじうせさせ給ひける(今昔物語たりふ形形の宣旨へ修堂の中姫三條院の修時皇后宮の女房なり)人の形小く作もまたそれみ似合たる家お調度などをも作り戯れ遊ぶ是をひゝなあそびといへり贈物のひゝなど事となり源氏榮花等をこしめ諸の物語また歌人の家集などともおほく見えたりもどより小兒の戯れなれをいつといふ定りたる時もあし今見女子のするまゝこと姉さまといふ事とかなほ源氏物語(紅葉賀正月の處)紫のうへふ少納言がひふ詞まとしだあすこしかとなひさせ給へどをあまりぬる人ひゝなあそびひゝみえへるものを云ふまたひゝなの中の源氏の君つくるひ立て内ふまいらせなせ給ふ人形ふ名を付て人の所作を學ぶ童あそび今も同じ

○ひゝなの家おひ源氏物語(螢)ひゝなの腰のみやつうへいとよくま給ひて云々又(野分)ひゝなの腰のひゝうゝおひすらん紫式部日記(下)このころはんごもみなやうしなひひゝなの屋つくりふまの春ま侍りふ

し云々反古にてひゝの家造りたるなり又ひなをも反古あて作れるとみゆ源氏(夕霧)けにけさうなき源氏ななけりと心おもいねい君達のあてををひひゝなつくりすべて遊び給ふとあり童戯へ古今かゝる事なしまゝととて小兒の言葉お飯をまゝといふ此戯れ飯作り種々食物を料理する學ひなればなり女子のみにあらず甲陽軍鑑(二)織田信長公幼少の時尾州治獸寺へ手習にわたり手跡をば不習江鮎をつりて款冬の棄にて贈を作る云々堀河百首題狂歌集若菜如竹が歌「七草にまゝごとをするわらひべの髪さきさるもつめる髻髻へたて髪とよむにや」

○今の雛祭へ上巳の祓を思へるにや俳諧氷鏡にひゝなあそびこそ憐なる故もあらねば打まうせてい難なるべし源氏物語に元日にも野分の朝にもひゝなとありし由侍れを今日に限らぬえられたり但いさゝうあひしらひあらば此ごろの俗に任せて今日のとあもなりぬべしやとて新編犬筑波集ふも少々まじへて入侍りし(此書享保十五年浪花人紹蓮といふものゝ撰なりそれを後お増山井と書名をかへ作者の名を削りて季吟の名を入たるい書肆が利を得むとの所爲なりさて新犬筑波の季吟の撰なり件の文の季吟が説を録したるなれば此頃の俗といふ治前後をいふ歟それより前もさるべきあたりにへもてはやし、事ながら民間にも専ら行ひれしおほやう其頃よりなるべし犬子集へ貞徳の撰にて寛永八年より同十年正月にまゐるし終る守武千句宗鑑が犬筑波に次での撰なり花の句よせたる中お政直が句ひなどいへど花の都の細工うなこれ鄙に雛をよせたり其頃いまだ通くもてあつうふことにあらずとみゆ明暦二年刻したる世話焼草三月の條三日節句云ゝひな遊巳日祓とつゝけて出たり寛文元年一雪が獨吟百韻もとむるふさて直段のやす屏風ひゝなあそびひゝたゝ祝言のみ(是又難に用)



相模愛甲郡敦木の里にて年毎ふ古ひなの損したるを見女共持出てさみ河に流し捨るとあり白酒を一  
銚子携へて河邊ふ至れば他の兒女もこゝみ來り互ひなを流しやるとを惜みて彼白酒をもて離杯を汲か  
ハしてひなを俵の小口などに載て流しやり一同み哀み泣くさまをなすなり此あたりのひな内裏ひな  
異なるとなし其外に藤の花をかつける女人形多しおもふにひなを河水に流すへもど祓除のとよなる  
べし妹脊山淨るりひなの道具を氷に流すとあるの作り設しとのみ思ひしふく似たるともあり

○寛文八年刻梅盛う撰へる細少石草餅を「けういひ餅もやいひひな餅（重荷）餅となりし艸花  
みる繪ひつ哉（離雲）延寶八年洛陽集三月三日ひしきものや袖うき合せ夫婦ひな（數寄）黒糸のむすぶ契や  
めをどひな（女綾戸）桃の替る此子ひなうざる間鍋によろし（漏卮）妹やひなのうんなへひそくふまつ（  
有知）こしうたや子持見なをす離の節句（自悦）とあり此頃ハ専ら節物となり同集（春部）飯たこや離の  
あたまたに七句さひひなもどより小きものみて後世までもまゐりし七八寸或ハ一尺おもこゆるなどハ  
いと近き風俗なり五元集離やそも基ばんふたてしまろうだけ折菓子や并筒ふなりてひなのたけ温故集超  
波が句に落雁にのまれてみゆる離うな（うの小きといへり）いま古今ひなハ寛政年中江戸ふて原舟月と云  
ふ者製し出て世に行へる

○享保六年壬七月十九日先頃浮觸八形装束之儀上方へ仕入遣い處不得止之儀有之由越に付越前守様  
へ伺いへば右装束之儀向後浮觸之通り八寸より上格へ不々并金入純子之装束させ義無用可仕いハ人形  
問屋共書付持参い事

○又むろしハ離遊びの調度も今の如く美麗なるを用ひず飯も汁も蛤の貝も盛て備へけるとが不角が篋絨

輪に離に世話局もおもさ尻あけて欠伸て棄る蛤の売（賣角）といふ句あり配膳の老女をいふなるべし又柳  
梅（五編）蛤であげるが娘氣ふいらすこ（明和七年の刻なり）都老子（寶曆二年）ハ近年ハ離配膳の調度な  
ど殊の外美をつくし金銀を鏤めなせする事といなりぬ然れども貧賤の家ハ蛤の貝殻ふ飲食を盛て供す  
るも又多しといへり今その殻をバ用ひされども必蛤を備ふるとハこれふよりてなり但し高貴のあたりハ  
格別のとさらでも都下にハ木地の五器なせハありしなり都老子に近年美を盡すといへば寛保延享のよ  
ろなどおもふへけれどさふハあらじ寛文七年町觸商賣の離の道具結構に不仕かろく可致事これ作り置て  
售ふをいふなり然らば早くよろしき家などふハこれを買ふて用ひし事とみゆ

○又繪櫃といふもの有り俳諧五節句（貞享成辰）桃の繪櫃（同柳）木地櫃ハ桃柳を繪く櫃の内ハ草の餅に赤  
飯も入る浮疊匙といふもの添是にハ繪なしかつば五器是なり木地の挽物ふ繪あり土佐日記に二月十六日  
ようさつうた都へのぼるついでみれば山崎の小櫃の繪もまうりのおほちのうたもかいらさけり賣人  
の心をぞ知らぬといふなる土佐日記の文ハ貫之ぬし任國にて幼女をうしなひし歎きの意前文お往くもの  
ハうはらねども幼きものハうせたりと思ひ出らるハ我心ハ商人ハ知らじと云なるべしこれ小兒のもてあ  
そぶ物なればなり又九月九日條菊繪櫃ひとつの形三月節句に同じ繪ハ菊を書なり内に栗も赤飯も入て浮臺  
匙かつが有り又自序の中ハ袴きぬ浦の蜚ハ桃柳の繪櫃をみずとわれハ田舎ハ行足たらずとみゆ其圖を  
みるに櫃の形圓長くいとゆる飯ひとつ形まて蓋ハ横長のすみきり角なり丸き曲物のうぶせ蓋なるハ繪ハ櫻  
と菊をかきたるハ後の製あて春秋二節を兼たる繪なり浦人ハ見ずといひしも都にハなくなて田舎ハの  
これる處も有ハ諸國奇遊談ハ繪櫃のとをいひて今も洛北ハ村里ハ三月節句にハ必用ふ予が幼き頃ま



てい都ふても用ひし故二月の末より賣ありきし今に絶て見あたらす今圖する遠國また洛北の今の姿を  
もあるすどてうぶせ蓋の丸き櫃に菊櫻の花をうきたる圖を出せり此冊子寛政の末の撰みて幼き頃といひ  
しい寶曆ふろにもやあらむ大うた其頃うるひしき膳出來ていついなくなりしなり繪櫃大小寸法不定お  
つば大小あり

○滑稽太平記ひなや立圖が傳ふ寛永十六年より祇園會兩度の山鉾練ものまでをひな人形み作り金銀を鏤  
め綾錦を飾り大造の膳を以て首尾し明る十七年お武江お持參しけるお心當ちがひてすべきやうなく引放  
しつゝ拂けり又宗門の大乗寺へも納め残る處明る十八年正月廿九日の火災お滅す云々

○以呂芝居(享保三年刻)といふ草子おひかさまお出します一升櫃の底はとな小判と云り其頃までお皆横  
長の櫃のみなり此繪いつ江戸お九月芝の神明祭禮おちぎびつとて飴を入て賣繪ふ藤の花とけける三  
月おもあらずおふお柳と桃との繪の轉じたるやうなれどさあらず此繪八朔の餅およる下ふみゆ又此  
祭禮お生姜をうり氏子の家お醴と酢を作る生姜を此月用ると昔物語端午の粽九月お生姜を蓋お載  
て取替す是等の祝儀の取うひし近き頃お見えすと享保十七年おうく云り又同物語お三月お草餅をひなの  
行器お入れ醴を錫お入て親類へ遣す事ありと云りそのうみ今の白酒ありしかと又あまざけも用ひし故お  
飯倉神明祭おこれを作るも後の離お用ひしものなればなり(雍州府志甘さけみえす土産門上白醴酒今處  
ふて是を製すもと筑前博多の練酒お倣てかます酒店の製とあれバ今の中汲り又并ひて山川酒六條油小  
路酒店よて醸す山間水多くお白えて濁る此酒その色お似て甘美なり因て名く夏日造之とあるは白酒なる  
べし今も山川酒といへり社記云八皇廿九代宣化天皇御宇諸國郡縣お屯倉を設て洪旱を救給ふその穀倉お

りし故お民俗飯倉領と号す是お倣て土民此所おして飯を扱ふ器を専ら製す臼杵木鉢餅器等なりチ器お古  
へ藤葛よておみ餅を盛ふよりて餅器の上畧なりと云々この説非なりちぎと呼い社お用ひしちぎの餘木と  
云へる意なり宣胤卿記文龜二年正月廿五日内裏御月次和歌御會云々賜入麴天酒等(甘さけなるべし)御傘  
おひと酒夏なり夜分おあらず夜字お句嫌なり醴字を書故なり六月朔日より七月廿日まで日毎奉る  
と公事根元に見ゆ

○昔の俳諧おひなのかんなべ見えたれば早く白酒を用ひしなるべし生姜市お貞享江戸鹿子お九月十六日  
芝禪明祭詣おやうかうす其外諸色市立なりとあれバ久しきとみお俗お目くされ生姜とて此市お目  
たれなどしたる者の售るを求む轡隨筆に拾芥抄食禁物部お三月五辛を食ひす九月生姜を食ひすとあり  
あさつき繪お離の膳供おさだまり芝神明の生姜祭り食品おあらずして何ぞといへりげお本草お孫思邈云  
八九月多食薑至春多患眼と云々孕婦食之令兒盈指あり目くされ生姜この儀おひよるべうらすろの辛味  
つよく目おまむの意なりこれを相贈るとい其時肥たる節物なればなり其うへ古諺あり貞徳百韻お生姜手  
が三へきと筆おすませて其自注お手がとしかみなら生姜三へきと云ふ俗語と記せり諺の意を押考  
るお盈指(生姜手)おておもふやうお物おれぬ手のわるきなり三へきお音信なるべし生姜お指の事より  
いひ三片おすしぱうりをおふ心ざしお松の葉といへるごとく生姜三片といひたるとより音信とりう  
しもえたるもの歟こお用なき事なれ共次お云ふさて繪ひつまた繪行器ともいへり延寶八年洛陽集お八  
朔「繪行器や今こそ秋よ藤の森(眠松)繪はうわや東うらげの後紐(可玖)繪はうわや後の灯心入となる花  
を(自悦)おもふ藤森の句お其邊おて賣たるおや今ころとて用ひらるゝ時をいふ







昨離屋立圖など繪のさま似たり菱川師宣出て人形の弊りの繪を摸せり誰神海(元祿)と云ふ冊子に菱氏か筆の品面顔うつす姿繪のやういそれぬいと口なし色あそめなせるきむくひむくの衣装人形といへり以呂芝居(正徳草子)といふ物に菱川がとをいひて人形を作るふも又上手あて去かたより浮望ふ役者共の姿を手づうら刻み舞臺衣装其儘に彩色さし上るといへるに非なるべし上あ引る冊子の趣をもて誤りて手づうら彫たりとする歟衣装に絹布ふて作れる故に衣装人形といふ彩色ふえたりとに奈真人形のやうなるおや望のもの有て作りし事あり共うに必下繪をうき上彩色えたるあて彫刻に他人ふさせたることを又衣装人形と云ふ今の押繪なるあり人倫訓蒙圖彙に衣装人形の諸の織物もて繪を切抜えれをつくる云々又同草子に紙ひな装束ひなあり紙ひな紙をもて頭を造るとあれはひうしの紙離今よりも質素なりまた押繪ならぬをも衣装人形といへり雍州府志に衣装人形木偶人作男女老少形施衣裳其小者謂芥子人形云々あるに木彫人形に絹布を着せたるなり

○世お子なき女の人形を愛する者あり子をほしく思ふ餘りなり漢土にもこれあり板橋雜記に顧眉生既屬龔芝麓、自計求嗣、而卒無子、甚至彫製香木爲男、四肢俱動、錦繡綢襪、乳母開懷哺之、保母褰襟作便溺狀、內外通稱小相、龔亦不之禁也、時龔以奉常寓湖上、枕人目爲人妖、

○さゝやうなるもの述異記に高江雜村記直大内見三異物焉、一小金盒大寸有六分、内貯彫刻牙器百種、如几榻舟車盤匱筆研投壺碁局絃管升斗算子之屬、具體而微、不受手指、用金鑄鉗而觀之、其一鑲象爲球、周身百孔、凡九層亦有七層五層者、以金管自孔中揆之、圓轉活動、層層相似、又皆刮磨光澤、中藏骸子一枚、金碧粲然、其外潔白無縫、非有漆合粘連之迹、名鬼工珠、其一酒杯二十有四、由大及小、如翠塔波、高二寸許、鍍木爲之、質黃色、有木理、薄如紙、柔軟

而輕脆、氣輒可飛動、然可注酒、三者精巧絕倫、雖有離婁公輸亦不能施其心目、不知當時何以鏤刻而成、守者曰此自外國航海來貢云、皆鬼工所作とあり精麗に異なれども相州管絃の湯もと細工に似たる物なり至巧たぐひなしといへども眞に無用の長物なるべし

獨樂(ふせうこまをうたこまといこまぢたんほう、たうま木をち廻し) 紙鳶(うなり) 鞦韆 いしなとり ささこ 大小こま

和名抄に獨樂和名古末都玖利有孔者也とみゆ今昔物語大江定基出家語の内寂照ヶ前なる鉢俄に拍鷗の如くくるくんと轉て前の鉢ともよりも疾く飛行て僧供を請て返りぬ又東山佛眼寺仁照阿闍梨房説天狗女來語の内ふ其時ふ女二間計投げ被伏ぬ二の脇を捧て天縛に懸て轉べると獨樂を廻すが如し暫計有て音を雲井の如して叫ぶ云々和名抄古本に都无求里此間云古方豆久利とある十二字を獨樂の下に分注せる今昔物語に拍鷗とあるにまづふりと訓べし和名抄に鷗の注に漢語抄に都布利とあれはなり(翻に戰國策に鷗蚌相持とあるものゝして今まぎといふ俗に鷗字を用る是なり其種類いと多し又鷗を今ハカイツツリムツツチヤウなど呼り和名抄にあれをふほといへり) 然らば獨樂をツムクリともコマツクリとも又コマツクリともまづに稱へしなりををばきてコマといふ字類抄に諸の往來等の書に獨樂の名みえたり○太平記(卅八)長講堂の大庭に獨樂を廻て遊びける童云々寛永癸卯帳慶友が句に目まふや拍のわたり瓜茄子(茄子などの枯ると舞といへば拍の舞ふうけたり)など俳諧あもまた多うるべし諸藝太平記よくるうくどめぐると九州の曲獨樂とても是はさあへあらじ云々其積が色三味線ふ頃日九州より獨樂廻しの少人のぼりて四條河原の小芝居あてまふの曲まをまへし數万の人を取て歴々の大芝居をすうら







んこちま坊主とまど云へるあり是ハ博多とまの如く緒を巻てまひすど其圖をみるにはんどうふまハ  
氷かめの形相似たる故の名歟其故ハ同書方言の中に水獺をはんどうめどあり又坊主まハ上圍くして  
四下ハはとく突りたり

○木をちまひし相州津久井縣にてハ正月兒童女木バちの中にて小錢をまきしてまひ止たる時又次の者錢  
を出してまひしてこま止たる時先の錢に少しあても重りたるハ勝あてその錢を取もし重ならざれば先者  
に負を取らるゝなり(錢こまハ後の手車の條にいふ)

○いりのりり名抄に辨色立成云紙老鴟(世間云師勞之)以紙爲鴟形乘風能飛一云紙鴟とわれハ古ハ音ハ  
て紙老鴟と呼ひしにてもどこの物にハあらぬやいりのりハ畿内あての名なり明暦二年丙申正月六  
日跡より浄法庵被仰付ハ通町中あて子供たこのり堅あけさせテ間敷ハ尤尙賣あも格テ間敷ハ

○關東あてたこと云ふ物類稱呼云西國あてたつ又ふうり唐津あてたこと云長崎あてたこと云ふ上野及  
信州あてたこといふ奥州にててんぐをたといふ何れも雅名ハあらず長崎の西川求林齋が町人囊(四)今  
日本のいりのりハ廣く大く作り弓をつけて空ハ鳴ひくをよしとす云ふ古のいりのりハ鳥賊の形ハ  
小く作りて麻の糸をつけ長閑なる春の日風ふくとなけれども陽氣あつて二三丈ばかりあ揚て小兒あひ  
うしめて悦ばしむ云ふげあも古書あみえたる紙鴟小く鳥賊の形たり

○今も一種すがたことと鳥を作る故からまだあとも云ふ其外諸鳥の彩色えたるもわり當あてたあの数  
多くつなぎて一寸ちのすがあてあぐるものあり此物江戸などハ春の戯とすれ共諸國他時弄ふとこ  
ろ多し志保之理ハ三州吉田より遠州見付のあたりまで五月五日家々大なる紙鴟を作りてわけ端午の遊と

す大さ一丈余方費銀百四十匁まづ四月の末より試みあけて端午各家廣き處或ハ河原へ出て美を爭ふ所の  
男女集り見て酒肴を鋪し終日遊ぶといふ賑なり

○夏山雜談ハ大坂などあてハ五六月西國邊ハ七八月兒童のもてあそぶなりといへり入子枕といふ冊子ハ  
(梅川忠兵衛が情死の條)折うら紙鴟世<sup>イカネ</sup>上ふはやり(前文に衣きうへる朔日卯花垣根ハ咲)さまハ氣をつ  
くしたるおもひ付三井富山をさハダしきれハをあつめ石たハみハ上町の屋敷うたひぢりめんの達磨ハ  
中島の苦なし仲間もみの盃ハ天満の蛇組白繪子のたう袖ハ新地の色茶屋鬼のういなハ渡邊筋鳥いハ阿  
波座が封じ文ハ新町の情盛うら紙鴟自羽雀ハ竹田さハいからハ嵐三郎四郎おやまいハ上村吉彌大黒  
いづくの寺のいなるべき龜やが方あも客うたよりあづり置し孔雀いハ馳走あも上手をえらみ町  
代の半兵衛あもせさせけると見えたり虛文ながら此物の流行えたる是より先西雀ハ二代男あも難波  
風の暮ハ鳥賊幟のをやりてさまハの作りもの雲あけ橋のたよりといへるあても知べし俳諧ハ鷹筑  
波集(寛永十五年貞徳撰)かみなりのなるハ天氣のあがる空とあるあいうのぼりこそ風ふふるれ(貞次)  
今のうなりといふもの付たるハや漢土ハ風箏といふものうなりなり續山井いハのぼり木あハりけれハ  
「魚や木あハのりいハ糸さくハ(道安)江戸三吟」物の名のたこや古郷のいかのぼり(信徳)簞絨輪水を  
汲袖風ぬれハ茶の水殿のうたくま守りの一角(利角)今小兒めんくふといふハ水汲とながら語ハ舞狂の  
轉訛なるべし

○豚物詩選風箏唐司空曙が詩ハ松泉麗門夜笙雀洛濱朝また唐高駘が詩ハ静絃聲響碧空宮商信任往來風後  
世これを紙鴟とするハ非なりといへり楊升庵集(五十七)古人殿閣簾棧間有風琴風箏皆因風動成音自諸宮



商又云王半山有風琴詩云風鉄相敲同可鳴此乃簾下鉄馬也今名紙簾曰風箏非也といへりこれ風鈴の類なり唐人の咏する物はなるべし響碧窓などいへるを思ふ風幡鳴器を付たるふやこゝ風みと云ふ今この製ハ其物の向ふ方を見て風を知るのみ音を聞くことをせず

○長崎歳時記二月條此月より四月八日まで市中あて風を放ち樂ひ快晴の日ハ金比羅山などへ行廚を携へ行てこれを放つ風巾の製一ならずばらん劍舞等買ばらん入道はた奴はた百足ばた蝶ばた障子ばた日本ばたあこばたかほりばたどんぐうばた桐お鳳凰海老尻天下太平天一天上大吉等の文字を作るもあり又つるいかしと云事あり硝子を細末ふまて糊に和し是を芋よま引つけ日お乾し風巾ふかけて放つ硝子よまと云ふ手元ハ常の芋よまなり互ふこれを以て町をへだて谷をさかひて相うる術の工拙ありよまどよまとすれあひ違ふされ行を負とす又十日金比羅祭禮參詣群集す麓の廣野ふ毛せんをまきべんどう携へ大入小兒風をかけて勝負を爭ふ此日市中のはた屋共野中あ假店をまつらひ硝子よまはたを商ふ人ゝこれが爲あ數百錢を費すといへり其風巾の圖を見るにばらんと稱するものゝもと變製と見ゆまたさ思われぬかほりはたなども同じものと見えて出島内の黒坊ども是を造りて海をへだて市中の者どつるかすとありといへりとかしと云ハ奪ひ合となり其唐製のまなる風巾見えたり崎陽の俗多く家業あ忘り浮靡の樂のみ事とす因て此樂より爭論をなし互ふ紙を蒙り又ハ田畑を踏めらしまゝ公訴出る事などあり他邦ふなき處古來よりの土風となひ無益いん方なしといへり

○廣東語(九)南海之佛山歳九月十日爲放鵲會先期主者懸式于鵲場鵲皆以白楚紙爲之凡兩翼一竿一弓翼廣一尺以平爲上竿長三斤二尺絃以竹根片或銅片以薄爲上主者察之嵌以印放日主者立一竿於地長二丈八十八人爲耦離竿二丈約之曰母過竿母不及竿出大竿復出小竿如是者賞約已依次而度鵲出於竿末則以線之直上者爲上線已直上則竿中更出一竿高至三丈又以線之直出於三丈之末者爲上線已直出於三丈之末又以鵲之聲清和中節而其態翹翔合度者爲上この小兒の翫ふあらず弓なりなりその絃竹また銅ふて作れるハこゝあてもまゝこれを用ふれ共大うたハ鯨鰓を用ゆ昔のいいうありけんおもふもど漢土の製あ倣へるものあや類柑子ふ元ゆひこく音をいふハ唐人風巾の雲ふ吼て春色をもよほす響もありとあれをうなり付たるを唐人だこと云ふことを

○賤緒手卷お延享寛延の頃風を上げるあさまの物すきをして尤大風をあげたりハッ花形九曜の星蜈蚣などの形の風をよこしらへて家々ああげたり畢竟ハ大人の慰めて子供の所作ふていなしといへり予が幼うりし頃までハ大なる風お切ぬき風として種々あ作り其間を切ぬき透したる細工風またからくり風とて傀儡師など作りたるハ箱の人形なり舟遊のさあはる又何の風ふてもよくあげまた小く風のやうみこしらへたるものありてのぼせたる風の糸ふとをし糸をまきくり上れば風の糸めの處まで上り行なり是と猿をやるいふたどハバ頼光など作りたる風お土蜘蛛をさるとし上に行盡たる時急お糸を引て風をどんと響うすれば頼光の太刀抜て蜘蛛を切るさ如く蜘蛛より血の如く赤き紙垂れ又細お截たる赤紙飛出るなどする類なり竹また鯨を用ひて機撥を作れり

○鞆和名抄鞆和名由佐波利もど北狄輕蹏の態を習ふ伎なるを後中國傳り専ら女子これを戯とするよし事物紀原等いへり和名ゆさなりハゆれる義あてゆすふるといふ是なり但こゝあハ田舎などあハする事もありそれも女子の戯にハあらず漢土ハ是を風流の事とす中山傳信録ハ女子於歲初皆懸毯爲戯又



有板舞戲積巨板於木橋上兩頭下空三尺許二女對立板上一起一落就勢躍起五六尺許不傾跌欲側也といへり  
江戸などふの小兒ことさらのあをびあひあらねどもやうのとするとあり是を曰杵と云ふなり房總志料  
に東隅郡万木城の麓ふ妙見の社あり秋社ふ鞆の戯あり太平記の頃の古俗を傳へしとみゆ其名をツクマ  
ヒと云名義未詳といへりツクマハ突舞なるべし江戸なども兒童二人あて一木を踏あふりて曰杵とい  
ひて遊ぶ事あり六玉川(二篇)ゆさへり小僧をのせてあやまらせなどいへり

○いしなせり榮花物語(月宴)へんをつつせいしなせりをさせ拾遺集(十八賀)春宮の石などりの石めしけ  
れバ卅一をつゝみて一ツふ一ともじを書てまいらせけるよみ人えらす「昔むさびひろひもをへんさいれ  
石の敷をみなとるよハハ幾より赤染石衛門家集ふ女院の姫きみときえさせし頃いしなどりの石をめす  
を参らすとて「すへらぎのきりへの庭のいしろこひろふこゝろありあゆうせてとれ山家集石なこの玉  
の落くる程なきふ過る月日ハかりやハする散木奇歌集いせの齋宮お侍るころいしなどりの石合といふ  
事せさせ給ひけるあちいさき草子のいしなどりの石の大さなるをつくりて十の石あひとつゝくき侍り  
けるどありて歌十首あり其歌金葉集一首入「くもりなくとよかさのほる朝日あひ君ぞつうへん万代ま  
でも和訓栞ふ法隆寺の寶物あいしなどりの玉あり小兒の語あ小石をいしなといふ伊勢あ石名原あり奥州  
あ石名坂ありといへりいしなとりハ今いふ手玉なるべし埃囊抄ふ石柝子をいしなこと訓り柝ハ字書ハ摸  
也とありて義ハうなへるやうなれ共其字面何み出たるう疑ふらく孤字の誤ふや帝京景物略ハ正月元且是  
月也女婦間手五丸且擲且拾且承曰柝子兒丸用象木錄磔爲之競以輕捷とありこれ手玉なるべし物類稱呼石  
投江戸あて手玉といひ東國あて石なんご又なつことも云ふ信州輕井澤邊にてはんねんはなど云ひ出羽あ

てだま越前あてなゝつて伊勢あてをのせ中國及薩摩あて石なごといふといへり

○房總志料上總附録の内に長柄山邊二郡の海錦砂子を産す女兒鹽イナゴといへるものなり又ナゴとい  
ふ其最小なるを市屋駱陀の海あ産す其名をキサゴといふ土人探て稻田の糞とすなどみゆ(大なるをい  
しなご小きをきさごといふあや)

○あさごハ鶴岡職人歌合時繪師「月うけふみぎのきさごかきよせてあゝあまの繪のはみ崎の松と有さ  
さごふ大小二種あり大和本草ハサシヤコ小螺なり殻薄し赤白の紋あり云々小兒其うらをつらぬきあつめ  
て玩とす(殻薄しといへるハ非なり堅厚あして小ハ斑文あり大ハ灰色あて斑なし)小野蘭山云本紳綱目山  
草部白菱集解ハ根形似扁螺といへり白菱根はとささごふ似たるものなければ此扁螺きさごなると明らか  
なり京師あてせ、介と云ふ小兒是を貫き瓢といへり(近江あてせ、介と云ハ膳所貝あて蛸をいふ是ど  
ハ異なり)せ、貝とハ錢貝の意なり江戸あてハだんべいささごと云たんべいハもと石つむ舟をいふ風俗  
文選(李由々湖水賦平ふ大石を積細ハ耕作のたすけなりとあり段平といふ舟の平たく堅厚ふ作れるを  
おもひよせて貝の名ふ負せたるあこそこのきさごの大なるを今ハ手玉ふもどれども古ハ小石を用ひし  
なり此介をいしなごとも云ふハ其の戯事よりうつれるなり

○又童戯ハ舌尖あきさごを吸付るものと有り屠龍工隨筆ハシガハミはヤサゴのとなり此貝を舌のさきあ吸  
つくれハ舌のさきあ物いはれぬ故に名けたりといへる説わろし神武天皇御歌ハ大石ハ八重匍纏へる小螺  
子と讀せ給へりしハ石なりタ、ミハ重なるをいふ今又一種石だ、みと云ふ介あり是ハ紋螺の石た、みふ  
似たるなり入子枕ハ正徳元年の梓行なりマ、と石なごなどふむすめらしくと云へるとあり此ごろまでも



手玉どるといふはざりしふや手玉どるふてつといふと相撲の條あり

○とじきといふハ小きハを遊ぶといしとじきハ軍器の名なり和名抄み槍（音繪和名以之波之岐ウ）建大木置石其上發機以投敵也とあり（拋石をまはじきと訓り前のつふての條出）小兒のはじきも石もてまたるよや正章獨吟千句「あてなるがせよと仰ある放會（イハシヤ）槍字誤て二字ふなれり」といへり西雀が二代男み漢履の下のさゝれ貝の浦めづらうみ手づうら玉拾ふ業までまゝこのむしを今よとじきといふなどゑて遊びぬ（こハ貞享元年の板なり）貝をも其處により有み任せて用ひしなるべし今江戸ふてハさきとじきといふも昔よりの名あてあるべし海近き處ハ貝類多くあればなり

○怡顏齋介品よきさで肥前みて猫貝と云長崎歳時記ハ猫貝を小兒玩ぶとを云て其法のせはじきと云ハ貝を握り手の甲ふうけ又手心ふうけ握り取置の上にちりたる餘り貝ハ一々はじき取て勝負を決す十五握と云ハ各々貝十二十を出し合せ順々目と鑿ぎ面をそむけて數十五をつりみ取るを勝とすとのみと云ハ各々目印ある貝一ツハ出し合せうれを掌あてふり出し餘り貝ハ俯せ一貝仰ぐものを勝とす○さきとじきハツマと云ハツマヅクの略ヤツといふハやつあたりなりさきとじきをかかふるあちうしとたこのくハヘダ十てうと云ふちうじハ重二なりそれを重ねれば八ツとなる章魚の足の數なり是ハ又二ツ加へて十となるをいふ

どうとめぐり（まのりの小佛一の膳いやくほうずく）首うたかれ（うさこ）いたいけ ちり

もち の、十三七ツ 尻くべに 木登り 土なぶり 小家を作る 籠廻し

童のどうとめぐりハ行道めぐりなり行道ハ佛家ふする事なり古ハたゞめぐりとのみいひしとみゆ榮華

（もとの乗）年十二三までの小法師おねぶつのさまうつし云々頭ハ鼻をぬりかはハハまろさものをつけたらんやうなり云々小き地藏并ハかくやおハすちんぞ見え又あまがつなどのものいひうさくとも見ゆ又ちでせものめぐりするとも見えたりとあり源氏（柳）又山家集ふまんだらしの行道とてころへのがなるハの大事ふて手をたてたるやうなり大師のハ經うさてうつませおハしませしけるどや傳へたりめぐり行道すべきやうだんも二重ふつまはされたり登るほどのわやうさこどハ大事なりかまへてこひまのりつきてめぐりわいむとの契ぞたのもしきハひしき山のちうひさるも源氏（柳）おまへす十よ日バウハ中宮（藤つ不）のハ八講なり云々又の日ハ院のハれう五巻の日なれば云々みふたちもさまのハのほうもちさハげてめぐり給ふ細流ハ五巻の日ハ第三日なり薪の行道ある日なり又明石巻ふわりの入道源氏あわられたる處ハ月夜ふて行道する物ハやり水ふたふれ入ふけり細流ハ物字ふ心なし行道すれをなり又鈴虫巻講師まうのなりきやうだうのハハ参りつとひ給（抄）提婆品を講するなり採薪及菓蔬隨時恭敬と提婆品ハあり八講ハ五日十座なり五巻の日といふハ中日ふて薪の行道あり行基并の法花經を我えしとハ薪こり菜つみ水くみつうへてそえしといふ歌を聲明ふして行道あるなり手桶ハ花を入六位藏人などみなひて主上の御行道のさきへ行なり僧衆右の歌をどろせめて唱ふるを讃嘆の聲といふハ法卷薪こるさんたんの聲云々藥師琉璃光如來本願功德經晝夜六時禮拜行道供養彼世尊琉璃光如來また阿彌陀經ハ飯食經行とある經行も行道なり拾芥抄齋月條正五九月云々或此月々上十五日可持戒齋行道慈覺大師廻り給ふ時正月一日二月八日十二月七日とありまた舞の双紙景清ハ折ふし頼朝ハ六ハハ所ふてえんぎやうだうまてましハけるなどみゆもと是より出たる童戯うまたおのづうこれお似たるものうそハ知べうらねどもどうだうめ







らとなりし廻る他町の子供み行逢は互みのぼりを出し合せ年齢ひとしき同士双方より一人ッ、出で走り  
くらふ是をハイロツと云ふ負方の、ぼりを奪取といへりまとのといろんふ二ッせり三ッせりと云とあり  
せらうと云ひ此せりあてせり合へんと云なりわたえといこれへ来よと云ふ方言と聞ゆ  
○小兒のうみかたりれといふと守武千句あわふなきともまらぬみちなりおさないやうみかたりれどたむ  
けまし東海道名所記に四月十六日三井寺みせんなん講といふ事ありそれを俗に千圓子といひならしむ  
子一千をつくりて持て參れば子どもの首うたしとややつたへし又猿樂の狂言小兒をかなばうしとい  
へるも堅固を祝へる名なるべし

○散木集連歌部みおほ空へなみだ法師となりよけり云々ある今いふ法師の意小兒のことといふなるべし  
うな法師の鉄のやうて潤なく肉もなく疲疲意と云となるべし先達の説み悴の子といふ義なしやせると  
云字なればやせうれの上畧ならんとさればかな法師も同意なりと柳亭いへりされど入道たる新發意と  
いへども唯はちとのみいひす然らばはちと云ひ猶法師の急呼なり

○又かたこといふ醒睡笑み女房の子を抱きたるをみて此子息いにくつと問へばこれのことし生れかた  
こでおなりありと答けりこれ一歳よいまだ足らぬをいふて前の義みあらず

○いたいけの痛氣なるべしといふ愛ひ意の謎をいふなり沙石集(三)繼母あまうれしく思っていたいけ  
したる飢物取具して文をやりける守武千句玉くしげまたかたふたの明やとてこする詠ひるなりいいた  
け花ぶさをちぶさなりと思ふらむ猿樂狂言み七ッみなる子がいたいけな云々尤双紙ひろき物みな人毎  
のこと草にいふおはぢの頭巾孫のきておやのくつをくいたいけさよ佐夜中山集みけふ摘や七ッみなる子

がいたいけ菜池田正式が狂歌合の判云さ見らべのてうちかふり又いたいけみよと侍れ正三の因果物語  
いたいけなる大うなどて寺の飼置給ふ契沖雜々記に山雲風土記に大穴持命の日子晝夜泣たまふといふ處  
の文を引て乗船而率巡八十島字其加志給願猶不止哭之世といきなき子をてうらかすといふ此字長加  
志とあるみ手をくいていふみや日本紀の推の字うつらかすとよめりうらかすといふもはれあなしき  
みやといへり今へてうらかすと云と小兒のみみふあらず此詞もど小兒みいへりとなれば字其加志と  
云ふ古語も似たるとなるべけれど小兒みあまやうすなどいふともあるをおもへば寵らかすや唯愛す  
るとなるべし

○まもりもちつく四季物語七夕の條そのくたものつくゑ物なごのうへみ蛛の小きありてやすらへばうなら  
すその願かなへりとして折ふし風み吹れて落くるも幸とるべきいうれしくまもりもちひをつく一休咄し(一)  
一休さこしめし善哉とて尻餅ついて喜び給云々あり嬉しがり喜べるみ尻もちつくといふ事今いひは  
ぬとなりまたその尻餅へ今いふとすこしうりて小をとりするやうみや今江戸のならし小兒生れ  
て一歳み満ざるみ立て歩むとあれは其祝ひみ餅を擣て親族み贈るはれを尻もちと云もど喜ぶとよりか  
る名目もあるみや善哉餅もこの意なりその條あり見合すべし

○のゝさま堀川百首題狂歌みどり子れのゝとゆびさし見る月や教への儘の佛なるらんゝといふ詞古く  
へ七十一番職人盡禰宜の歌我戀をいのると人の聞やせんさゝやき聲みのゝとすさん接るみのゝのむの  
轉なるべしのみのもとも活きて祈る詞なり靈異記などみ祈るをのゝとよめり万葉み乞字をもよめり又  
叩頭の字などを訓るも同意なり佛神み乞願ふ故に其詞を体語としてやがて佛神をのゝといへりと聞ゆ



さらばとく古言なり

○お月さまいくつ十三七ッといへるとをどれるみや類柑子乳のミ子お意味を付てや十三夜(沾州)松の落葉丹前の部難波津壺論てゝのとの子へないくつ十三七ッあらまだとてや云々沾源がわやよしと舞舟よふ場所を思たし山からふよつと十三七ッ蓮真鉢垢離の音頭の鼻へ来るこの十三七ッの月句をて童謡をどれるなり又似たる謠あり物類稱呼を東國の童謡に旅籠にいくら十三七ッと云と有いあしへ鳥羽街道あて十三錢のとたをありしととなりとぞといへり(旅籠に古き草子などふれたを食ふ行なをありて今茶やみて飯を食ふおなじ旅店に宿するふへあらず)

○小兒星のどふを見てよべひしと云ふ帝京景物略に兒見流火則暗之曰賊星夜不以小兒女衣置星月下曰女怕花星照則怕賊星照亦不置洗濯餘水爲夜游神飲馬也曰不當價如吳語云罪過

○尼が紅暮霞なり小兒へおまんうへふといふ黄昏をおまんが時といふも是なり然るを何やらの筆すさひおまんが時王莽が時といふ事なり王莽漢家四百年のその年ふ出たるものなり黄昏ハ晝夜のあひなればそれふ似たりといへる附會の説なりおまんといふへふに依て女の名ふいひへめをを又おうまんと詛りたるふこそ尼が紅といふも天の紅なり惠空(紀州淨福寺住)が節用集お和俗呼赤色之雲曰尼紅粉貞徳が油加瀨ふ雲のうへも湯や足うすらんべおやでへかぬあまら紅粉の色寛永發句口べおやうすむ入日の尼が崎よれらも天を尼ふどりなしたり接るふ舞樂の安摩の面へ繪やうの鼻の左右ふ丸き巴の如き紋あり(おれあまがはなるべし阿摩の女母の梵語なり)守武千句いつう法師のうかび出ましまうくるも又まうくるものま小舟(おれハ男子の出生いなくて女子のみまうくるなりこれ女をのまといへると

古くありしなり)又熊野比丘尼が色を賣ものとなりて紅粉をて粧ひ臉べあつけたるを尼がはといひけ是るふや鷹筑波集おおやふまうられ迷惑やする尼がはあつけたる紅粉をういぬぐひなをあるをともふべしハ小兒のされどをたるを親の叱りたるなり安宅松といふ歌舞伎歌ふ尼うへお付てとやういふいとうよといへる此句などを意とまたとみゆ

○又あまの前のあまがつの處ふもいへる如く今も女のとをまといへるとありて女の頬紅とみても通すべし昔の女へはへおさしたり此故お少女椿の葩を類また額おも粘戯れあり當時の教を學べるなり不角が撰める續清鮑ふ誰惚なまし椿はへおと云ふ句あり又同人撰水訓棹と云ふ集ふ似合うと袖とめ前の茄子鉄槩と云付合の句もあり茄子の皮を口お含ではぐりめの學ひすると今もあり似たる戲なり

○又小兒の京橋中橋おまんがべにと云ふ今も女兒のてまり唄おん京橋なん／＼中橋おつや十六大ふり袖とうたふされど同く江戸の中ふも殊お繁華の處なれば女子の風俗もとりわきて勝れたるを云なるべしさればおまんがべふもうるいしきを處がらふ付て云なりおまんといふ天が紅の時なるを女子の名ふどりていへり或説は中をしまおまんいなりとてにを供へて願がけする社あり享保の頃はやれりといへり思ふふ此いなるの名の童謡およりて人の云出しあや

○木のぼり枕双組(二)桃の木お童の／＼り枝をきる處黒きはうき着たるをのこ走りきてこふまてなどいへば木のもとおよりてひきゆるがすおあやうがりて猿のやうにういつきておるもおうし梅なをのなりたる折もさやうふぞありし類柑子柿の木おあをふ子共や蟹と猿(白雪)書紀神代卷一書曰門前有一好井や上有百枝杜樹故彦火を出見尊跳昇其樹而立之



好遊多賢集卷六

手抄

○ひなたはこり嘉多言といふ書ふ(慶安三年刻)ひなたはうといひ日南北向と書侍ると云へり然るをひなたはくりなどいふよりしうらむといへり此説非なり舊本今昔物語西京仕鷹者出家語の中ひなたを誇もせん若菜も摘なむ云ふまた著聞集(二十)ある田舎人京上まで侍けるを宿みて天道はこりして居たりける云ふあは日なたの暖なるふあふる意あや焼とをはこらすといひ其塵をはこりといふ是なり  
○土なぶ砂あそび唐太宗の土城竹馬兒童之樂といへる是なり又法華經方便品乃至童子戲聚砂成佛塔如是諸人等皆已成佛道とあり季吟獨吟百韵あまるをとり腹を機嫌をとり／＼にあやま泥をふむやあさなす

○又小家を作るを長明方式記は幼子のついでうけふ小き家作りて居たるとあり一代男お里の童があまかへるの家などしてといへるいとはさやうなるをいへり(此と藝の條ふいふ)

○繩廻し近ごろ江戸及近在の小兒樽のたを竹の枝など丁字形したるあて地上を押まろろべし歩行戯ありたが廻したたがまひし初めけむ

雪山(雪佛、雪ころばし、雪やけ、雪女、雪こんさ、雪打、寒どり、寒氷)よろし(元木寒、竹うへし、つき)

○ふりつゝみ(はらつゝみ)雪の詠め月花をもうねて須臾の程お白だへならぬ限もなくおもしろさなめあひあんなれど北風とげしく吹て手足こゆるいたへがたく往來も自由ならず晴て後消く／＼りて穢けなるいさらふもいとす路次のぬりり日數経れ共ういさかたきなどを思へ月花にたぐふべきあらず雪のふる日の寒くころあれといすなはなることうしあへ下さまのとあてやひとまきたありにいとなる詠めと興し給ふにころ又さ

らぬも酒のむ人と兒童といへ寒さをも恐れすいたく降つむをよるあふも多うるべし歐陽子が乃知一雪万人喜といへる雪爲五穀之精といへるも據て豊年をおもふとなれば其意異なり公事根源曰昔初雪のふる日羣臣参内し侍ると初雪の見参とや也桓武天皇延暦十一年十一月より始る初雪あかざらず深雪の時ハ必諸陳見参をとる也此事絶て久しと云ふいあしへ初雪の日を暦みたるあや紫式部家集こよみあひ初雪ふるとかきたる日目にちうき日野のたけといふ山雪いとふうく見やらるればこゝにかくひの、杉村うつむ雪をしほの山お色やまうへるとあり

○雪ふて岩を作ると萬葉集(十九)天平勝寶三年正月三日内藏忌寸繩磨の館お宴樂の時の歌お積雪形成重巖之起(節信云起勢誤)奇巧綵緞草樹之花、屬此様久米朝臣廣繩作歌一首、奈泥之故波秋咲物乎君宅之雪巖爾左家里祁流可母、遊行女婦蒲生娘子歌一首、雪鳥巖爾殖有奈泥之故波千世爾開奴可君之插頭爾(雪の岩お花を彩り作るとあるい作り花を立る也)

○雪の山の精少納言物のあはれえらせうはなる物の條とすの十日のはせよ雪のいとたううふりたるを女房などもなしてものゝふたにいれつゝいとおほくおくをおなじく庭あまとの山を作らせ侍らんとてさふらひめしておはせとふていへあつまりて作るお殿守司の人あて歩きよめお参りたるなどもみによりていとたうく作りなす宮つうさなど参り集りてあつくいへとふつくれば所のまう三四人まいるたる殿守司の人お二十人ばかりあなりあけり里なるさふらひめしつういしなぞすけふ此山つくる人おいろく給ひすべし云といふいとせ給へば月月の十五日までさふらひなんとす云ふ(その山大なるを思ふべし又其續きあ)その山作りたる日式部ぞうたゝか多使ふてまいたればえとねさし出し物などい

好遊多賢集卷六

手抄



ふみけふの雪山つくらせ給へ所なんなき雪前のつほふも作らせ給へり春宮弘徽殿もつくらせ給へり  
京極殿もつくらせ給へりなどいへば「こゝろ」のそめづらしとみる雪の山とて雪くふふりにけるか  
な源氏(朝良)女の童の雪まろばす處いとははうまろいさむとふくつけがれどもえもおしうさでわぶ  
めりかたへへ東のつまなどお出わて心もどなけわらふ一とせ中宮のおまへ雪の山作られたりしよふ  
ふりたる雪なれど猶りづしきもえなき事をえなし給へりしが禁秘御抄雪山條(上略)凡此事古不見自  
中古事也事始文略一條院御時以後也清少納言記在其仔細初雪見參近代絶畢初雪日仰六位藏人令取見參藏  
人束帶或宿衣召朝餉仰之内侍傳仰藏人進見參給祿内藏寮絹大藏雀布也また雪山のと榮花(晚待皇)などふ  
もみゆ河海抄み雪山伏見院永仁の頃まであり諸家記録ふ出づ藏人頭奉行として沙汰する也云々

○雪佛雪よろべし新拾遺集(十七釋教)雪あて丈六のはどけを作り奉りて供養すとてよめり(膳西上人)い  
あしへの鶴の林のみゆきうとおもひとくふろわねなりけり俳諧ふみ犬子集すへりてへ人も雪ころのあ  
し哉寛永七霜月晦日西御門跡遠行の明御門跡西うらへとちへゆき佛(已上二句共み貞徳の句也)季吟獨吟  
所またら雪ころばかり立て作る遠摩もそれとみりうず(今ハ雪ころがし雪ころばし猶もふきてハ雪  
ころしとも云ど古き俳諧ハ皆雪ころハうしと云り)又雪丸けハ(今雪丸めと云なり)續山井お餅の皮むく  
どやいもむ雪丸け(伊賀上野蟬吟)曾我物語おくの、狩かしハう峠よてたきくちの太郎大石を谷へおし落  
しければすまふの條おみまの入道まやうげん石ころハうしのたきぐちとのとあひさハのや五郎どの出  
てとり給へり云々

○東京夢華錄十二月の條ハ此月雖無節序而豪貴之家遇雪即開筵迎雪獅裝雪燈云會親舊(まの灯笼ハいう

やうお作るあうあらむ今とらんへの作るハ雪を丸くつくねて石灯笼の火ぶくろの如く横穴をほり灯心  
のふとさを一筋油を漬し中お入て火を點せばよくともるもし灯心多く火のつよければ雪解て火ともらぬ  
なり

○安布真加瀬あわれそろしとやくるなりけり雪道は何と分てしすねならんとあるハ雪やけと付たるな  
り霜やけ雪やけともふ<sup>シヨヤケ</sup>凍といふべし<sup>シヨヤケ</sup>和名抄漢書音義云凍(陟玉反和名比美辨色立成云之毛久知)手足  
中寒作瘡也とあり蜻蛉日記霜くちまじなへんとてさへぐもいとあわれなり契沖云まもくちハ俗ハ霜バレ  
といふ霜くちの出来るものハ初霜を手足おぬればそれすといへばあうするをまじなふといへり

○雪女俳諧懷子(九)先ふるハ雪女もや北のうた(作者不知)見られぬや山のねく様ゆき女(重供)續山井目  
み見ぬや是もこせをの雪女(黒米)雲となり雨となる身ハ雪女(圓宅)有といへどみぬハ貞女ハ雪女(丘貞)  
續五元集川むらひととりさめたる翹賣雪女ハ帯が黒くて

○雪ふんて徒然草(百八十二)ふれくこ雪たんとこのこゆきといふ事よねつさふるひたるお似たれハ粉雪  
といふたまれこゆきといふべきをあやまりてたんをのどいふなりうきや木のまたふとうたふべしとあ  
る物まより昔よりいひけるあや鳥羽院おさなくおしまして雪のふるおかく仰られけるよし讃岐のす  
けが日記お書たりと有(後世この歌石臼など挽あうたふみや壺のいしふみお此ころのならひ二上りたん  
せんまのひこまみなねじけたる音云ふれく粉雪たまれこ雪垣や木のまたふとよねふるハ歌みいふハ  
ハ遙おとりてあさましといへり)今小兒が雪こんくといふものもとなり(雪をいふより雨こんくとい  
ふいふハますくうつりてろの義をなさせ)



○堀河百首題狂歌よみ人不知「えのまさへ寺の垣ふりたまる嬉しかりける雪やうく」(休庵(四))  
雪やこんこあられやこんこお寺の柿木ふりやつもれこんこ俳諧あゝ寛永頼帳句雪こんこたまれこんこ  
やまろ狐また犬子集ふ於丹州(休庵)つれ／＼をすさむたんの粉雪哉嘉多言(慶安三年刻)わらへへお  
て侍しをり親たちのせいし給ふも聞かれずして雪こ／＼と庭に出つゝをほれあそべりし云々佐夜中山  
集さまれ粉雪丹波いづきの目いつとい續山井あすの雪こん今夜さよぐれ又古き前句付に(雨より  
へまし／＼)人ざれ阿部の童子の母も来ずまの雪こん／＼を隠していへるなり

○雪打禁秘抄抄子お瀬口相具衛士及所夫上殿上舍於棟抛雪所衆作雪山この雪抛の屋のうへの雪をふるし  
て山作る料とするなり犬子集雪打やさながら春の花いくさ安布良加瀬子供やおもふまゝお狂へむ繼橋を  
廣くうけたる雪打お佐夜中山集雪礫うつ子や五ツ六ツの花五元集雪うちや／＼手をうへす小忌衣聯珠詩  
格方南山の詩自縁着得重葦煖戯拾庭前雪打人源氏(浮舟)わらへへの雪あそびえたるけえひのやうあふふ  
るひあがりける

○寒垢離洛陽集に寒垢離があびける水あ月もなし(有知)寒垢離や綿子て足らぬ人もあり(自悦)まれいね  
き事などありて堪うたき事をするなり今世乞食坊の寒ざりといふ代垢離の意なりもろこしの潑寒胡戯  
といへるハ只寒中お水嬉することみゆ唐書中宗神龍元年十一月己丑洛城南門觀潑寒胡戯また睿宗景雲二  
年十二月丁未作潑寒胡戯の事止みたるハ玄宗開元元年十二月己亥禁潑寒胡戯とみえたり其後この事な  
し今小兒裸體なるをかんこはりと云ふハ水をまぐひたり昔の小兒ハおかん水といひしなり佐夜中山集(一  
付句)おさなまのみる朝うみつめたきをわらん水ともてはやしと云へり

○又氷をたゞく戯ハ鬼貫が獨言お柄抄ハ桶の内にみつきて柄をにぎれどもうごうごあるハおらんへの瓶  
より出しもてあそびてハたゞく音かねのごとくむうへり／＼みのごとし漢土ふも揚萬里が穉子弄氷とい  
へる詩に穉子金盆脱曉氷彩絲穿取當銀証敲成玉聲穿林響忽作玻璃碎地聲

○小兒玩具埃囊鈔(三)小兒戯物字事さいらとハ編竹と書き或ハ編木と書く筑子ハまきりこ也肚ハころ獨  
樂ハこぞ礫著ハつんバハ石忤子いしなご无木簀むささい草薙くさきり騾鼓ふりつゝみ輪子りうこ同類也  
といへり此内他の條お出たるをべいとす肚ハ古來いなる物ともいこされバ今さだうハ知がだし接る  
おころどハころ／＼とまろぶもの故お名づくるなるべし肚ハ字書お腹肚なりとあれバ其義ころあうハ  
す恐らくハ此の字を誤りたるならむ肚五一切滑なる良とあれバ其義をとりて此字を用ひしおやさて其形  
ハえられず但し兩面みて四面おあらじ今ハ卑き者の詞ハ錢をチヤンコロといひ又小兒ハ小石を石ころ  
といふ皆同義なり錢ふいふハ犬子集おもなりされて居るハ衾やさつまた鐘の湯つちへ入るころ錢また  
似勢物語おうし男錢えりける女ふいへりけりうしろめたくやおもひけん我ならでよと錢えるなりたあし  
やころうけとらぬえつととなりともと有をみれハ文字なまきなり惡錢をころといひけるあや

○万葉集(十三)菅根之根毛一伏三向凝呂爾また同集(十)春霞田菜引今日之暮三伏一向不穢照良武高松之  
野爾るの一伏三向と三伏一向といふおなじ物なるべし十訓抄お嵯峨の御門の一伏三仰不來人待暗降雨戀筒  
寝とら／＼せ給ひて小野萱お是をよめと給へせけりつきよみこぬひとまたるかきくらしあめもふらなん  
とびつゝもねんとよめりけれバ滲氣色なほりあけりどなんどらハへのうつむきさいといふ物あ一つふし  
て三あふけるを月夜といふなりと見えたりこハ正しく右の埃囊抄お无木簀といつる物とをゆ一ツふし三











○錢太鼓唐人笛諸大鑑(貞享元年)此處ハ浴中のお乳の人の集りあるふ所なり錢太鼓唐人笛のひびき竹馬の鈴の音云々小きを錢お譬へていふハ錢龜錢蓮などのとし今豆太鼓といふも同義なり

○風車ハ漢名もおなじ帝京景物略に出たり尤草子めくるもの、内或連歌の前句おあぢきなやたいまいしでも見ん(付句)みどり子のなきがかたみの風くるま雍州府志云所々是を作る然れ共祇園町を本とす春の初多く造ら藁の臺ふ建置て賣これ兒女の玩具ふして和風の體を含みかのづうら春初發生の氣あり永代藏(二八)お童子すうしの猿松の風車をするなどやうく一日お丸とりふしてち三十七八文より五十までのまとするうせぬなり松の落葉(丹前部八幡詣出端)さてもくみごとやいたいけしたる物ありはりまのかはやぬりちうふ千くさ結びみ笹むすひ山まなむすひお風車ひやうたんあやどる山がらくるまふける友千鳥とらまだらの犬の子とるや蓬のやはた山云々(みな玩具なり)江戸名物鑑お雜司谷風車新蕎麥や給仕めぐる風車(これ明和七年の作なり其頃雜司谷専らとやりたり)草根集奇車戀手おとれをなたより吹風車めぐるあふべきまるとぞ見む後奈良院御撰何曾お風車の謎嵐ハ山を去て軒のへんより帝京景物略剖棘楷二寸錯互貼方紙其兩端紙各紅緑中孔以細竹橫安秣竿上迎風張而疾趨則轉如輪紅綠渾如暈曰風車路德延孩兒詩の相教放風旋と云もこれなり

○とりこ雍州府志云木をもて人形鳥獸の形并諸品の模範を作り紙よて張ぬく云々もろこしハ泥砂といふ泥砂めてそのかたを作る故名く云々文匣小篋みな張脱とすといへり西雀大鑑(七)人形屋をいふ處師子笛張ぬきの虎又ハふんぞしなしの赤鬼太鼓もたぬやす神鳴是みな童部たらしの様といへり(今とりこのもてあそび時代のみゆるものハ男女の大あたまむしりの摸を用ひて作れり寶曆已上の風俗なり

其外田樂をやく女袴きたる座頭などの首の動くハ虎の首より出たりとみゆこも又今ハ古きものなり

○笛西雀大鑑獅子笛(上お引り)これハ獵夫の用る鹿笛ふハあらず頭お獅子を付たる笛なるべし

○鶯笛ハ犬子集けふいとや鶯笛もねの日かな誰身の上春のまらへの琴の音に鶯笛のその聲ハ云々

○さるまつ笛名物六帖お夢溪談の頼叫子をさるまつ笛といへり永代藏お童部すうしの猿松の風車とあれハ笛のみふハあらず猿松ハ廣く子供の名あいふふや

○雲雀笛ハもとひばりを捕ふる爲お吹笛なり一代男(一)小兒弄びの内ふひばり笛をとりそへ云々あり

○伊勢みやげの笛諸大鑑お伊勢みやげの笛を吹て門お遊びし云々貞享四年の衣服ハな形をみるあいせ土産の模様あり笛ハ小き笙の笛なり永代藏お伊勢のみやげをいふ處笙の笛員抄子えて世を渡る海の若和布の眞砂の數えらすなどいへり

○麥笛漢盤草うなひ子グサさひあならず麥笛の聲おどろく夏のひるよし洛陽集麥笛や折らら蟬ハ一聲あり(榮也)麥笛や夜毎ふ人の在所より(同上)和漢三才圖會云大小麥共中空白色云々小麥稍厚硬小兒用以作笛吹之謂之麥葉笛とあり麥笛といふハ即是めて今竹の管笛お麥見らもて飾りたるおハあらず麥の稍を鳴すなり杜中の葉を卷てならす類也麥見ら細工今色々あり吳社編ハ虎丘之麥柴則彫簾回精疊架連楣皆以麥爲之如黃屋瑠璃光射帶旭眞奇玩也と巧みお造れると見ゆれと染て用る事をえらざるふや

○ぞんびん江戸ふてハぞんびんと云ふ藝苑日涉お舞葫蘆ハソビンと出たり一名倒拔氣と云ふ帝京景物畧云瑠璃云々有脚而嘘吸者大聲咏々小聲啼々曰倒拔氣日下舊聞お倚晴閣雜鈔を引て曰瑠璃廠原爲燒殿瓦之用瓦有黃碧二種殿瓦之外所製曰魚瓶曰瑠璃片曰胡蘆曰響葫蘆小兒口銜嘘吸成聲俗名倒拔氣傳家寶(二



集）料物不可與兒といふ條ふ年節内外滿街都有賣料汁不動并料汁琉璃喇叭但此等要物最薄最脆遍地小兒每喜吹願若一吹破吸入喉嚨無藥能救其破片極是鋼利入目即瞎入腹腸斷料絲燈上料絲害亦同此全在父兄切戒ひゝどろの喇叭のボンビソといひ異なり料絲のひゝどろの管又ハ連珠なり

○彈き猿古き前句付（書名缺）行あたりけり／＼彈うるゝ度あたまを叩く猿（これ今もあるものなり）

○又幟さるゝもど五月幟の下ふ付たる括り猿なりもてあそびのハ其跡異なり江戸二色（明和の末ふ刻したる草子なれどもろの圖ハ古ふれり）のぼり猿の畫あり其うへあ「きをうへて猿もさつきの竹のぼり風のくるまひわりてころゐれ短冊はどの小幡の風ふ吹るれバ猿竿の上ふのるなり又文字の扁おのり猿といふハ非なり嘉多言あも文字の篇ふ小さと大さとといふべきを小猿大猿などいふハ誤なりどうやといへり

○釣する猿正章千句霞む瀧津の鯉つらんとや劫を經し春の山猿智恵ありて貞徳が判ふ云ふ猿の釣すると體なる古事ハ未知いへとも世ふいひ馴たる諺なればよき寄合あていど云りこれ蕪物ふ作りたるふハあらねど蕪物も此諺ふよりて作れる物とまらる林鴻があらひつうしといふ冊子ハ似船が句「來しうたや猿ハ魚つるかきつむた

○手を引連りたる猿ハ僧祇律第八云佛在王舍城諸比丘爲調達作舉羯磨乃至佛告比丘過去世時空間處有五百獼猴遊行人間有一尼拘類樹々下有井々有月影猴主見已歸諸伴言月死落井當共出之令諸世間破於暗冥諸猴言云何能出主云我知出法我捉樹枝汝捉我尾展轉相連乃可出之諸猴皆從纒欲至水猴重枝弱枝折墮井とある是なり據尻ハ五色線と引て曰靈靈運遊名山觀掛猿下飲百臂相連云々世ふ猿の手をとり連りて水中の月

影をとらんとするさまを畫くハ此とふや但し月かけをどらんとするといハ經律異相ふてや見侍りし相連り下る故事とハ別なりまうるをひとつみ心得て圖し侍るふこそ

○水挽さる今水からくりふうすをひくさるあり水ふてひくと見えて天祿識錄ハ唐人の作たる孩兒の詩ハ折竹裝泥燕縵絲放紙驚互誇輪水磴相効發風旋と見えたり皆蕪具なり風旋かさくるまなるべし

○米搗さる續五元集凍たる手うら銀波較のうへ風にハこるふ猿の米つき江戸二色夏冬を赤ふふんどしひとつあて人あましら米をつくなり篋絨輪ハ輕薄わらひ乳貫ハの常手みやげふ米つき猿を小猿賣（千翁）

○桃核の猴守武千句うつりうねれば猿どころなれ花の春もみぢの秋の桃のさね以呂三絃あもゝの穰めて猿を作り竹の切ふて耳うきこしらへ當座の用ふ立る云々後日男桃のたねふて猿を作り又ハひやうたんの口を細工おして居云々などいへるみな手細工にて賣ものおなきものとみえたりこれ今も作る括り猿の形えたるなりうれとハ異なれ共後藤氏お傳へていふ四郎兵衛祐乘亨徳の頃將軍家へ仕へしが故ありて召籠られし時心願を起し桃の穰に日吉二十一社獼猴六十餘を彫たる是より祐乘に刀劔を飾る具どもを造らまむとなん（又彫刻師吉岡因幡が先祖も桃核ハ山王神興二十一各舟ハ乗せあまたの猴掉さしてこぎまへる處を彫たるがかり家お傳へて賣とす余も一覽えたり桃核僅ハ半分ほどなり神興にハ寶珠又鳳皇など付たるいと細やうふ彫たるやうふ覺ゆ）されもとより桃核ふて猿作る事あるより出たる事とまらる

○蜜柑の猿洛陽集ハ向齒や蜜柑の猿の鴈をたつ（榮也）一代男ふみうん一ツ黒髪をぬうせられ猿などして遊びし夜云々は今も掛簾を髪毛ふて括りて猿お作るなり寛文十二年俳諧三ッ物うら白や海老上臍のまにかさね（正長）前句付廣海原煎り海老ハげふ上臍の箸休め



○松笠の鳥日次紀事八朔條云今日兒童戲以松笠造雉鳥或以鳥賊魚甲作鷺鷥或以絲絮拈金灯籠草實作瓢形又以桃仁製松虫是等類自玩之或互相贈謂之賴合云々綵雀亦與雉鳥鷺鷥之類同又意苴子連枝折之與行器贈之とあり世間胸簀用八朔の雀ハ珠數玉ふつなぎ捨られといへる是なり

○松毬マツコあて蕪物を作るハ雉のみならず江戸二色ハ二刀を帶たる奴と鉄うたげたる農夫ありいづれも體バうり松うさなり其狂歌ハ百姓と奴と着たをよくみれば松つふくりてござりまうするこれ雉の鳥より出たる作りものとみゆ鳥賊甲の鷺今も作りて弄ぶものなり酸漿ササヅキの瓢ヒヤコまた同じ桃仁の松虫これをみれば今西瓜スイカ子ゴあて鈴虫を作るのもとなり

○若荷の雀不角ノカク矢の根鍛冶後集よき作意とて譽られけり水物ハ鴨はなしたハ若荷の子素仙六玉川六玉川(二篇)名月やめうぐの雀も生のこり又(四篇)めうぐの雀のくさる舟底といへるハ臺の肴物の飾ふてありしなり俳諧白花鳥實曆五年けしきせり水さうなの跡跡留る故なり身めうぐの如く頭ハ赤くとうがらしの如しいうの甲カミ生るハ稗ヒヤの中中留る子どもの慰なぐさみなる鳥なり

○折居の蛙清輔朝臣集女をうらみて云々青き筋ある紙あてうへるのうたを作りて書つけてやりける云々○折居の鳥一代男(一)或時ハれり居をゆうし比翼の鳥の形ハ是ぞ云々これ紙の折方あて鳥を作るなり五元集拾遺ハ聖代を仰ける句とて雀折て日よを多きは大晦日といへり春の設けの提子などをかざる料なるべし俳諧三正猿折形の舟なかさハやうきつた(麥林)今をり雀といふものや伊呂芝居ハ女子の遊あそびとをいふ處ハ折すゑの雀蹴形の兜兜あり今も作るものなり疊紙のみ折居と心得るハ非なり(此ハ淺草に紙折たゝみて種々の物を作り人物鳥獸何ふても人の望み任せて造る者あり)

○紙捻カミミの大江戸枝折ふもの思ひこよりの犬も瘦うたち望一ハ紙より細工をよくまたりとうやわら野集する雨アメいせの望一ガこより哉(濡水)

○はさみ切形俳諧名物鑑寶曆中より江戸の名物を集む明和七年梓行芝芝缺切形「さき形ハ咲せて見ハや菊の花と出たり其人芝ハ在しなるべしこれ今もある紙をたゝみて夾ハサミ剪ハサミて種々の紋を載る者なり寶曆十三年の板諸藝遊戯双六ハ紋形とあり宋の曾三異同話録ハ蔣大坊母夫人曰少日隨親詣泰山東嶽天下之精藝畢集人有紙一百番鑿爲錢運鑿如飛既畢舉之其下一番未嘗有鑿痕其上九十九番紙錢也こハ手づまの類なり近時ハとさみあて紙のはしよりさき初め人物ハ眉も目もはさみを止めず紙を廻マしなハがらき畢てはなれたる紙を合すれば全紙の如し又錦書を白紙あかさね毛筋の如く細やうおほりぬくもありはさみあて截るたぐみあ及ハす

假面(めんがた)般若乙御前天狗まは吹芥子人形 今戶焼の女 相撲人形 金平人形 飛人形

輕さ人形 でんば 西行 鈴 摩喉羅 繪幀 蠶燭の燕(とんぼ)蝶(とんぼ) 小鍋 箔團扇(ぼ)つ

挑灯(チカ) 麥わらの蛇 づぼく

めんかたとい湯桶よみなり着聞集(十二)小盗の條ハ面オモた一ツありけるハ其面をして顔をうくして夜なく強盜をまけるなりけりと有おもてかたと讀へし鎌倉職人盡歌合猿樂の歌いどつるハわれどハさちよ見えしとておもてかたをもささほしきうな今小兒玩物のめんがたハ面摸なり瓦の摸ハあ土を入れてぬくなりまた芥子面とて唾ハて指のほらみ付る小き瓦の面ありしガ今ハかりて錢のやうふて紋形いろく付たる面打となれり元祿の頃若葉合と云ふ歌仙の内ハ常陽花をどり指人形の輕はづみ被けし面ハ指人形の爲



お作れるなり

○般若面ハ尤草子ひろき物ありうのとなんふやのめんのかといへり怖ろしき女の面を般若といふ般若  
心經頌鈔云翻般若云智慧其跡也清淨不受諸妄染云々見えて智慧といふとの梵語なり鬼女の面をこんふや  
といへるハ言の轉りたるなるべしそのもと謠曲より出づ葵上ハ怨靈行者が加持する誦文を聞て「あらお  
そろしの般若聲やど有り大般若波羅密多第五百七十八般若理趣分曰菩薩摩訶薩摧伏一切魔怨とみゆ般若  
の聲ふ怕れたる怨靈が着る面をやがて般若といひたるふや又猿樂金春が家々傳來の鬼女の古面あり般若  
坊といひし者の製造とむ般若坊ハ南都の僧どう是ふよりて鬼女の面をこんふやといふとど又同じ家あ  
三光といふ尉の面ありこれも三光坊とて三井寺の僧の作といへり然らば老翁の面を三光といはざるハい  
うハ其角が錦繡綴み鬼女の面ハ般若あだち女とて古來より角ある面なり黒塚の能の位よかもひ合せ侍れ  
ば全く一念の鬼女といふふいあらすたハ雨雨のたぐひなるべしとて源助ふすてあたらしく角なき面をう  
たせけるハ時ふとりての工みならんやとすされしふいふハ誠うといへる兼盛の謠も思ひやりたるやと難  
談して兩吟の物さきあひなしぬ「黒塚のまともれり雪女(其角)蹴あげ目あつ白草の足袋(沾蓬)云々  
あり源助ハ江戸鹿子面打日比谷一町目出目源助と出たり(此事いつの頃なるう元祿中の俳諧なり)諸藝  
太平記(四)張貫の般若の面雨あうたれしをみるやうみ天晴芝居のみせ物したらば直打のある男云々耳袋  
み金剛太夫家み金剛といへる面あり是ハ古き仁王の顔を面ふ拵へたるなり其太夫ハこれが祟りふや鼻を  
損じけるどうや右の面ハ京都の一古寺お納めおき代替ふ一度これを拜するとゝなむ  
○乙彦前の面今おたふくといふハ多福の義とどる歟略きておふくなどいふゆりこれを世ハ山谷集四休

の語れ内鹿茶談飯飽即休三平二満通即休とあるを三平ハ兩の頬と鼻をいひ二満ハ額と頤とにて乙彦前の  
事なり此説古く聞えたれども非なり平ハ心安らうよしして満ハたらぬとなきなり三と二ハ大敷をいふな  
るべし

○天狗の面畫ふうけるも古くハ鳥の嘴の如くなりし鼻の長さハ狩野元信僧正坊を畫きしより起れり其圖  
今ハ鞍馬山あり假面ハ鼻の長さハ胡德樂の面なり又王の鼻といふハ猿太彦なりといへり俳諧(馬鹿怒  
慥と云書あり其返答に破冒魔といふ書あり又その拾遺を非免路といふその内ハ)木高くて赤きや王のは  
な柘榴訛言云いづれの君のとふう尤憚ある事なり陳云この王の鼻ハ彦靈殿の祭やらんあうつける面なり  
されば此頃のハ歌ふまであうひ物とろへの内へいれ人あまねくえれり只末社の神ぞ云々(赤い物揃へ  
の小歌ハ聚樂城普請の時の歌なりその内ハ王のとな有り尤の草子あ出つ)按ハ元信が天狗の像ハ胡德  
樂の面などよりしもの歟今神祭あみる猿太彦の面なり是王のはなとて古くより有しものならバ元信が  
工夫奇とするふ及ばず王のとなハ元信の畫より後なるべし今鼻の長きを大天狗嘴尖りたるを小天狗とい  
へるハ何とぞ帝京景物略云紙泥面具曰鬼臉鬼鼻目染鬚曰鬼鬚これハ鬼の面れあるハ鼻の大なるあるハ  
目の大なる毛の色のさまハなるもの種々有なり胸算用(元祿五年)五文の面張貫提ひとつにてといへる  
ハ大黒の面はりぬきなり

○まは吹屠龍工隨筆お今童の弄びに口の尖りたる面ハ鎌倉鶴が岡の拜殿お海よりあがりたるとてまは吹  
と名付たる面あり是を學びたるものとおもへるといへりまはふきハ小ばうといふ介潮の干潟ありて口  
を閉る時水はじきの如く潮をふく假面のまはふきハ其義をあらすこれうをふきを誤りとなへしものハ嘯



く面のおうしげなるなり鷹筑波集(二人名はいうい)見たもなきうそふく良いさん三郎月の夜ふろみ垢を  
らく助

○芥子人形一代男(一)小笠をさざし芥子人形おきわたり雲雀笛をとり揃へ云々五元集菓子盆よけし人形  
や桃の花これ三月ひなの句の中ふあり雍州府志云木偶人施衣裳小者謂芥子人形芥子比至小者云々

○今日の土の小人形西鶴置土産(三)淺草寺町の横筋を行ふ内のみえすくよし簾住われたる宿の棚お小紫  
葵屋と看板出して土人形の細工する云々浄亭主此人形小紫ならバ先遊女おしての帯がせまし殊ようしろ  
のとりなりまんさら人のおうためきたをといへば豊文ふ一ツ、賣ものを無理な浄吟味それの七十四奴に  
賣ときのせむぎと笑ひけるど有り今もあるふり袖さすはりたる人形なるべし同じ小人形おあみ笠きた  
る遊客などもあり

○すまふ人形今熊と金太郎のすまふ人形うす板をきりぬきて作れるものあり江戸二色お其製のすまふ人  
形あり二ツともお人形の跡同くは、かぶりを赤く彩りたるいと鹿相の作りどみゆ狂歌「かちもすまひま  
けもすまひの木偶坊勝負の人の手のうちおありすまふどりの書をきりぬきて後みつぎをはろくさきた  
るを貼つけて立つやうふして二人向はせ息をふきて倒し勝負をみるものあり板おて作れるといつれ先な  
るうみれも古きものどみゆ相撲大全の叙ふ一戯具取見之摺疊予少時有藏紙聯剪爲鼎形折如人字乃細觀之  
則塗鴉其首而爲髻綵飾其腰以爲幘各紀其字号宛然兩人將相撲之貌也其藏法裝之席上戲者亦相射曲折優  
尖其口嘴氣息微々一齊吹起來則盤旋欹斜暫時爭競面仆得其上者爲勝而呼號(寶曆癸未)

○金平人形西雀が大鑑お肩車お乗て懷より具足着たる金平を賜り道すがら切合としてまた手遊とて飛人

形又ハ染分の手拭云々土佐ふし淨るりに金平の事を作れり(作者ハ岡清兵衛といふものなり)和泉太夫こ  
れをうたりて大に行へる是より世お強き事を金平といふ手遊一枚繪と双紙などお出たり今も男めける女  
子を金平といふ(又漆おひとしく固き糊を製て金平と名付また牛旁の煮やうふ金平あり)六玉川(十篇)金  
平ハ女おありておもしろき(金時ともいへる)もとよりなり温故集お遊女歳旦「盃や金時らしき初笑ひ  
(袂)とあり又土佐節草摺引ふも鬼を茶の子けさんひらだんべい

○飛人形ハ竹の串を膏藥お捻り付てこね返らす張子人形なるべし描金書譜お笠着て匍匐る人形みえたり  
今淺草寺雷門にて賣る龜山の化物などいふ張子二ツよて一ツハ上に着せこねうへれば脱て形うけるや  
うふしたりいと近き物なり又綿お作れる鬼もありこれらハもとより有しなるべし龜山の化物ハ四國を廻  
て猿になると云ふ諺を人形お作りたるが始めて其外さまハ作りしなるべし龜山の化物と云ふハ觀せる  
のあやしきものを龜山おて生捕しと云しと度々ありしゆゑ云なれたるといふゆ此外お紙を方あた  
み獅子舞の形お作り足おまゝいみ具を付てうちはおてあふぎとぞらるものあり祐信お書お笠きたる人形  
を紙お作りたるおうす板の車を付て扇おてあふきて走らするものあり似たる戲なり雲合奇蹤(十五)鉛賣  
のとをいふ處挑了糖相一頭辦有搖鼓兒泥人兒引線兒紙糊小蓋兒燈草覆板兒丁々當々とあり燈草覆板兒ハ  
飛人形の類おや

○輕わさの人形西鶴置土産(五)渡世うなし毎夜味まひの人形揃へて賣云々

○てんば西行法師鈴離袖海といふ草子お東福寺裏の門前此邊の名物地黃煎土おて作りし狐鈴鳴てんばさ  
てハ風呂敷わいぢけたる富士見西行かねをためるものハあの西行の心やうならでハならぬ其故ハたどひ



首ハ落されてもふろ敷包のこなさぬと大わらひ云々これら今も有るものなり土人形を造るみな合せ摸にてぬくなり彼風呂敷包みやうの物ハ後ハ土を捻りて付さるなり故ハこれハ中ハ空虚なし首ハ缺やすきも風呂敷ハ背ハ焼付あれハ落タたしてハみやくなき事ながら西行の圖古書をみるハ笈を負て包み物負つるハなしさるを賣（二）ふも西行法師のひらづハみハ世をはなれたる袖あわいうけられ難波うたふさまよひてハ蘆の枯葉ハ驚き云いへり是今いふ風呂敷包みなり風呂敷ハ風呂ハ入る時敷ものなれハ常に物包むをハひらつハみといへり似たる物故後ハ（大少の違ひハあるべし）風呂敷ハ物を包み用ひてひら包の名ハうせたるみやひら包ハ下學集ハ平包と有り雅亮裝束抄ハひらつハみのうハし俳諧染糸の内千句ハ「泥足も其儘涼ハ一橋岩根ハおろしハおく平包ハさて包み負へる西行ハ俗圖あるべけれど是もやハ古く其さま有とハおなり熊野山妙見院八坂寺太師修行影像ハのひら包みを背負たりでんハは今もあり小き炮烙の俗名なり享保中に書たる調味抄といふ物ハ蒲挺をはうろく焼ハするを云て深き大でんハは入又てんハばおてふたをして火つよくたけハびしやハさみなる云々てんハば手くハおやとハおもへどさる古雅の名ハあるべうらさハらば土炮烙の略稱なるべし土焼の鈴ハ洛陽集ハ初午や典主ハの鈴を彩りけり（春澄）兆典主ハ東福寺の繪具谷の土を繪畫の着色ハみ用ひたりとハ其邊の產物故とり合てハうハいへり土焼の鈴を彩色するなり續山井ハに風ハなるやすハの子ともハもてあるハ（捨女鈴子といふを子共ハいひうけしなるべし）

○廢帳羅を名物六帖ハ土のちハ人形としたるハへわろし東京夢華錄（七夕條）街内皆賣磨喝樂乃小塑土偶耳悉以彫木彩裝欄座或用紅紗碧籠或飾以金珠牙翠有一對直數千者禁中及貴家與土庶爲時物追陪云々又小兒須眞新荷葉執之益効磨磨喝樂兒童輩特地新粧競誇麗至初六日七日晚貴家多結綵樓於庭謂之乞巧樓鋪陳

磨喝樂花瓜酒筆硯炙針線或兒童裁詩女郎呈巧云々

○格致鏡原藏時記七夕俗以蠟作嬰兒形浮水中以爲戲爲婦人宜子之祥謂之化生本出西域謂之摩羅羅今富家猶有此（接るハ化生の事後ハへ常の翫具ハて節物とせざりしにや五雜俎ハ歲時記を引て云ハありて王建詩水拍銀盤弄化生是也今人以泥塑嬰兒或銀範者知爲化生而不知七夕之戲といへり）

○清三朝實錄大聰八年十二月丁酉墨爾根喇嘛（ムルゲンラマ）載護法喇嘛（サハハ）噶喇金身至初元世祖時有伯斯八喇嘛（バハスハ）用千金鑄護法喇嘛像奉祀于五台山後請移于沙漠（サハ）又有沙爾巴庫圖克圖喇嘛（シャルバククトラマ）復移于元裔察哈爾國祀之墨爾根喇嘛見天運已歸我國皇上云々于是載佛來歸（カミ）また十年春正月云々先是孟庫地方送喇嘛（カミ）佛至命造銀塔一座重五百兩塗以金銀其骸骨于塔中置殿左側禮祀之（右三朝實錄の文分明ならず元世ハ鑄たる像清ハ來るといひ又其骸骨を塔中安置すといふハ鑄像の外ハ其骨をも送り來れるハ但し元の時のハ其骨を像の内にこめたるにや）只一處ハ麻哈喇（マハラ）とあるハ噶字脱たるなるべしされどもこのマコキヤラ即麻羅羅なるべし法華經如來神力品ハ天龍夜叉など舉たる内緊那羅摩羅伽人非人等とある摩羅羅伽（マララガ）もおなじ物やハこハ人類ハいならず異なるべし元曲選ハ張孔目智勘魔合羅雜劇あり高山といふ者手あそび品ハ賣ありくその内ハ魔合羅もあるなり常ある玩物ハて七夕に限らず帝京景物略ハ忿怒變像鳥斯藏每貢之曰馬哈喇佛本邦ハて達摩を翫ふもかなハ七夕ハ蠟をもて嬰兒を作り其外種ハの形も作るハよりて麻合羅をも作りしハ節物となりて塑像も賣り臺座など風流を盡す事となれるならん（越後信濃などの國ハて七月一日より七夕ハ至るまで家毎ハ簷ハ繩をとり簪の人形を吊すハ異なれども七夕ハ人形を弄するハ似たり）

○江戸ハて近ごろ文政二三年の頃より七夕の短冊つくる條ハ種ハの物を色紙ハて張りてつるす其頃ハな



べてせしふへあらざりし只濱町邊の町屋などみて見しが今の太夫江戸の内せぬ所もなきやうなり

○繪のぼり懐子(三)五月幟「門や又立榮ゆべき紙のぼり(正村)其外紙のぼりといふ句多き寛永頃端午のぼり皆紙にてありしあり羅山文集慶安辛卯五月端午云々家々挿蒲造粽且爲童兒立紙幡木曾また一代女(六)五月の處のぼりの紙をつぎて素人繪をたのむ云々五元集拾遺なよ竹の末葉のこして紙のぼり今も

田舎ふこれを用ゆ又五元集(卯月十七日或人の愛子おねだり申されて)郭公幟をめよとすめけり云もあれは此頃より下さまふても布のぼり行へしや武者繪の板すりて蘇枋黄汁等にて彩れり江戸あても鍾馗のぼり紙を用るもあれを此ころの少なきや板行の繪なぞ絶たり(奥村文角などダ墨繪の鍾馗を板にて摺たる目玉ふ金箔置たるなぞありし)羅山井繪みかくや目みゆる鬼うみのぼり(風鈴軒)又色三線み手遊の幟賣あり

○頭巾すけ江戸二色お出たり狂歌お四天王はどふいさはし祈るなり山ふしのたねのおひささ(此冊子の斷具みれらの物見ゆれば元禄頃の書とあらる)

○發燭の燕俳諧口寄草(元文元年)冠り付(ひいち)附木を二まい尻尾ふし質曆ごろの京師の繪本(書風寺澤昌次とみゆ)ふこの燕うり有り首の掠の子なり又明和八年板本の江戸名物鑑み海老藏蜻蛉賣あり竹の先ふ蜻蛉つなぎたり今もある蝶とまれといふものゝ製みや(蝶も明和の頃よりあるう宗因が句お世中へ蝶とまれかくもあれと云ふの斷具より昔の句なり柳亭云京師八坂の茶屋のとをかける草子みてうゝとまれの小歌出たり件の句いよれをどれり然らば菜の葉とまれと云ふ昔の小歌なり下總佐原あたりよて蝶とまれらんかのめ飛すうらんかのめどうたひて踊るこれも同じたぐひう

○小鍋貫之が娘の幼き時の歌として驚ふなどさへなくぞちやほしき小鍋やはしき母やこひしき此歌袋双紙

(四)俊頼口傳女花郎物語(下)等み見えたり

○箔の團扇はづき挑灯伊呂三絃ふ遊女七月の贈り物をいふ處お箔の團扇五十本はづき挑灯三十云ふ是の踊の調度なるべし

○麥わらの蛭井唐團扇江戸砂子駒込富士權現祭日常所の産唐團扇とらの蛭五色網夏の果物と見えたり六玉川(六篇)江戸の蛭がでてあつゝ朝日江戸二色おもその書あり狂歌みや水無月のついたつ布の賣もの

外ふさぐひのあらぬうちちや江戸塵拾駒とみ不二祭麥わらの蛭の賣永のまろ此處の百姓喜八と云ものふと案じ付てこれを作りて賣といへり(淺草の不二權現にて此蛭を賣へ近きとみゆ)江戸近在を二月頃あるきてみれば田のくろみ竹など立て葉盒子ふこの蛭のごとく稲稈にて編たるものを結付たりおもふ初午稻荷祭みしら合子作りて供物を入るなるべしその合子の編うたこの蛭の口の如し次でお蛭を作りゆひ付るの蛭を遊る呪ひなどお蛭合子のあみうたより出たりとみゆ常のへ大森村の外ふ麥わらの手遊ひ賣所なし

○駒込麥わらの蛭の賣永の頃此の處の百姓喜八と云もの是を作りて祭禮の日市お賣る一とせ疫病をやりし時此蛭ある家へ免れたりと云ふ難司谷麥稈の角兵獅子の高田の四ッ家町に住し久米と云へる女製し初たり寛延二年の夏の事なり其まろ參詣多うりしうばよく售たりとぞ

○又菰の穂なぞめて鳥獸を作るのもとよりあて近ごろ大森村にて男女のうつらを棕櫚にて作ると上手になれり大師河原のみやげふ買て翫間の生醉などかふれるもみゆこの頃出たる折句みまだ鮫洲きげ



んで坊主をゆるうつら(坊主あたまふ)着やすけなり(帝京景物略楷編益冠幘額曰草帽云々香客歸途衣有一寸塵頭有草帽面有鬼臉云々物まうでのかへさふわら細工のかぶりものして鬼の面をきたるなり

○つばく此手遊古きものと見えて慶長ごろの古書人物の衣のやうなどおも付たり犬筑波集とらへ  
の縁ふてくるふ薬師堂もてあひぬる瑠璃のつばくもと壺どのみいふべきを小兒の詞のかさねいふ例  
にて名付るふや懷子(十)立別れいなうあたりの朝ひらきつばくはどの涙たる中(重頼)松の落葉京童と  
いふ東上るりきさらぎや初午参のみやげとて鈴やつばく風くるま好色盛衰記(貞享五年)稻荷の前つば  
くかまく作り賣これる土佛の氷あそび云々これ壺と釜となり

削り花 餅はな 栗花うやの穂の鳥猿みづくなどの類 作り花 五色網 とせの花 箔おきの金  
一丈長刀 浮鳥(人形) 酒中花 紙でつばう 竹の吊瓶 ふくら雀(雀の笛) 與次郎人形

古今集(集十)物名二條の後春宮のみやす所とすける時ふめどにけづりもなさせりけるをよませ給ひける  
(文屋やすひで)花の木よあらざらめども咲ふけりふりふしこのみなる時もがな與義抄に著といふ草をゆ  
ひ集めてそれふけづり花をさす事といへり著和名抄女止とあり史記龜策傳おも見えて其壺の篋とす  
る物なり削り花の木をけづりかけて花お作るなり延喜式圖書寮金銅花瓶二口削花二(左右各進一枚近  
衛寮受供之)と有り佛名の時ふ削り花を供養に備ふる事多くみゆその引歌とも餘材抄お委しく出たり夏  
山雜談ふ今も西國邊にて著ふ作りはなを付て神佛ふさぐる所も有といへり西武獨吟常盤の松のうゝ  
りあくよや霞酌さいのものふ削り花(寛永ごろの書に繪物師が家ふ削り花立る洲とま有り今も芋の臺  
何くれの臺といふものみなけづりばなり)

○餅花宗長紀行(下)冬の梅の一りん二りんかすうにさきて匂ふこそわかれふうらめあまりお正月の童  
の餅花つけたるやうふさきたるふさひしうらす云々(宗長へ宗祇が弟子にて文明大永ごろの人なり)餅花  
もと節物なるを江戸目黒の餅花などへ常ふあり江戸二色あまの餅花出たり竹串をささうけて其末ごとふ  
餅を丸くひらめて付たり吉野の花餅を學びたるものなり(委しくへ食類の部あひへり)四神地名録(下)目  
黒村條名産餅花あり又膳より近年童子の手遊ひに栗花うやの穂にて馬猿虫るい此外いろく細工を仕  
出し賣るものろの細工尤よしとわれこれらの手あそび寛政の初年より出来しと知らる

○作り花雑色の綵帛もて造れるをいふ万葉集(十九)雪の巖み綵花を殖たるをよめる歌あり伊勢物語梅の  
作り花ふ雛を付てたてまつるとて我たのむ君がためふと折花の時しもわうぬ物にそ有ける清少納言二月  
朔日のとをいふ處おうしき櫻の一丈ばうりよていみじう咲たるやうあてみこしのもとあわれべいと  
さきたるうな梅こそたけ今さうりなんめれとみゆるいつくりたるなんめり金葉集(十雜下)後三條院うく  
れおひしとして後五月五日一品の宮の御帳ふさうふうけ侍りけるお櫻の作りとなのさゝれたりけるをみ  
てよめる藤原有祐朝臣あやめ草ねをのみうくるよの中おありたりへたる花櫻うな翁古今集お後冷泉院の  
御時御前ふて甌新成櫻花といへる心とをのこともつうまつりけるお大納言忠家櫻はな折て見しあも  
うへぬふ散ぬ計をえるしなりけり大納言經信さもあらはれ暮行春も雲の上お散とえらぬ花し匂ひて  
○五色網江戸砂子駒込富士社の條當所の産とある内五色網あり丹前能(五)娘一人手わふふハ五色のあみ  
を拵へ伊勢参りの土産物賣と織といふとまなく母お孝と盡し云いへり又今金柑など入て小き網も有こ  
れとい異ふて手遊ふあらねと松の葉おあみすきといふ小歌ありこの町の子供でかしましきみの町です







て猿を挑灯の如き臺の上より作りたるものより出たりとみゆ江戸二色小圖ありこれ中笛ありて鳴すと今の雀の如くなるなり

○與次郎屠龍工隨筆ふ能狂言手遊やかとんまり小弓といふおどろん今やうの手遊び紙にて作りたる人形小笠をさせ細き串を兩方の脇の下あさして末のひらきたる所におもりをつけて人形を指の先より立てすれどもふりてつり合て立なりそれ人のをさるやうお見ゆればおとらうといふとあてかんどれかんとれといふものにて此前與二部といふ非人の笠の上にてまへして來たるものなるべしといへり猿樂の狂言何といふものお出たるれ今覺えと與次郎といふ非人頭の通稱なり風流旅日記(貞享四年刻)伊勢あひの山お杉お玉とといふおみな是此處の與次郎が内儀むすめたちなりといひ又雍州府志に乞食酋長惣謂與次郎云々四人或ハ六人入人家庭踊躍敲手唱祝語この故あたりの與次郎といふ件隨筆お非人が笠の上お舞して來たりしとあるの近時のと聞えたればそれ故お與次郎といふおわらす與次郎とをさるさお似たる故お名けしなりこの人形を遊女が指の先お舞す圖實永七年板本伽羅女といふ草子にあり和名抄酒胡子諸葛相如酒胡子賦云因木成形象人質在掌握而可玩遇盃盤而則出とあり

○又笠の上お人形(與次郎人形おわらす)置て舞す圖ハ西雀が真享中の冊子おみえたり與次郎人形酒席お用ると其餘下いふ併せみべし簀織輪いたく鉄燈臺の照り行人の與次郎つり合片齒下駄(詠流)驚足おのりたる行人なりそのうねおと與次郎のやうなるをいふ今これを與次郎兵衛といふへます(鄙俚なり)

人形筆(ひき物) 手車(錢こま) きやくん 狸小僧 おやふや人形 うへり屏風 芋虫 はいづ

ま(江戸は)づき、海は)づき(草の葉を鳴す、葱を吹 松葉のくさり 茶碗を手お付る 瓜戰(核

柿)菓物燈籠

人形筆ハ佐夜中山集付ふ水螢のをうしきふしといひ立て筆の軸もつくる人形嶺南雜記お葵扇出東莞其販于江浙者特其鹿耳其精者有彩畫人物極工緻又有柄中鏤空内刻人物自能運動云々あるのひりやうのうちなり其柄の中おうらく人形あると人形筆のことしこの筆ハ有馬の産物なり又おふ湯元細工のひきものも有馬(箱根)よりも古あるべし童蒙先習うさきもの、内有馬のひきもの慶長十七年おかくいへり合子のみふて飯物の作らすともおもこれす

○手車錢こま嗜人傳お享保の初め手車といふもの賣翁あり糸もて廻して是ハたがのじやといへこれハおれがのじやと答へて童部買てもてあそぶ云々これハ土おて小井戸くるまの如く作り糸を結付その糸を巻付て糸の端を持てつるし下れば廻るなりそれを上あすこしえやくれお糸おのづうら車みから巻いてつ追も舞ふ今もあるものなりおふ錢車とて田舎の兒女錢の穴お箸などをとし短く切たるふて木綿を糸おとるかの手車の中に心棒なけれ共これより出たるものとみゆ又件の錢車を土おて作り心棒を管おして糸を左の手の指おて心棒の上下を押へ地お廻しつまみて掌おとる物あり是を錢こまといふ柳亭子云元祿の末寶永のいじめ頃何人お錢こまを作り出し一時行ハれたる白梅園驚水が新玉櫛簞寶永六年の印本なり其中お香山梅之助と云人あり常お獨樂を翫しとある時文錢六七文又ハ十文バうり筆の軸お貫き別お心木を通し糸を巻てこれを舞し、と是が爲お記を書て曰獨樂よ獨樂よ汝時を得たり一ころ楊弓の柱お催促せられ行成の紙袍を着て射もきの座お廻り、さへ珍らしき事いひたりしお綾錦金襴の衣服さら



ひやりあ真紅紫の組糸を帯ふし猩々緋縹紗の蒲團あ象牙玳瑁の杖をつき一曲の舞に錦の袂を翻せば満座  
頤を解て喜び(中略)すがふ永代橋何くれの曲も長じたるものい賞美せられて時代時給の箱の中ふ豊か  
眠り云々ありすがき獨樂の舞ふ中あすがき幾遍驛永代橋も松の葉あ載たる端唄の名なりこれも同く  
其まん中あ彈うたひるゝ間あるなり小兒の蕪弄のみにい非ず酒席などの興ふ舞しゝなりといへり然らば  
手車ハ土あて作れるふ習ひて錢さすも土あて作れるとふなりし古今のハ四文錢の形なればいと近き制と  
まらる今も下總千葉の邊あ若き者ども日待などの遊びに各錢車を作りてもちよりこれを舞して少しふ  
ても永くまふを勝とし戯るゝ長崎なども錢さすハ錢を五六文かさねたるなり  
○きやこん層龍工隨筆奥州岩城あて所の祭ふ賣笛ありその形今女のはすかんさしのやうふ二股ふ針のご  
とく角たてる鐵あて三すばうりふ作りて又針のやうなる薄き鐵を中の處へ三本あなる如くまたへ付たる  
を齒ふくこへて二股あ分れたる處ふまたへ付たる鐵の一すばかり餘りたるを指あてうてばきやこんく  
となる故其をきやこんといふなり鐵あて作りたるさまのむくつけなき蝦夷松前などの風俗のうつりたる  
物と思ひるといへりたちぬる癸未のとし此笛を江戸の子供もてあそびたり鳴す音のひやばんども聞ゆる  
うちひやばんと稱へたり(其頃落首ひやばんを吹ひていどんくどかねがものいふ今のの中まとし有  
て禁せられて止めぬ)  
○猩々小僧浮人形ああり又鉛細工もするなり江戸名物鑑ふ蜀黍や出水の中のみたれがみ(疎蓬)この句  
ハ其さまを見たてたるなり(江戸二色を見るふ猩々壺の中より出て下ふ臺ありて笛をさしたり笛を吹け  
ば人形廻るなるべし)

○元祿五年刻胸算用小刀細工あ馬の尾あてまうけたる鯛釣もはやりやめハ云々情おもふあこれ今もある  
弓ふ糸のりて魚の糸あ付てをとりながら下ふくだる飴物ありそれなるべし

○あやふやの人形氣儘頭巾を着たる江戸二色ふ出たり是元祿の傳あて其時代をえるべきものなり狂歌ふ  
半面ハ美人やら悪女やらこの人形のかはのあやふや(あやふやハ危ふむあて疑ふ意となれり明和安永  
頃女書ハ股なぞ出したるをあふなどいへり

○かへり屏風これも江戸二色ふ出てくれ屏風といへり

○芋虫これも同草子あ出づ紙あて作りたる内ふ土を丸めて入れ破たる竹のうへをまろやすものなり是  
今の手遊の儀のもとなり

○はゝつき榮花(初花)上東門院の御事をすす處はゝつきなどをふさくらめてすへたらんやうふと見えさ  
せ給ふ源氏(野分)玉うつらのさまをいふ處はゝつきといふゆるやうふくらみて髪のかゝれるひま  
くうつくしうればゆとあり今白くうつくしきを雞卵あ替ふることくふくらうつくしきを古ハ酸  
醬ふたとへたりとみゆ

○江戸はゝづき柳亭子云寛文二年の板案内者といふ草子七月七日日本願寺立花のとをいふ處あ近年江戸酸  
漿子とて七月あ色の赤きをもとめ出してよき彩色の物とす云々今丹波はゝづきの名をいひて江戸はゝづ  
きの名をいえず今六月より色づきたる酸醬あるハ是即江戸はゝづき江戸はゝづきハ絶て丹波の國の種  
を求めて植けるものうといへり按るあ古き俳諧もみちの句あ丹波をいへると多し丹の赤さあたるなり丹  
波はゝづきの名もこれと同例なると知べし又江戸はゝづきといふハ江戸の人情尤き事を好めハ赤



く彩れるを江戸と稱へしなるべし故に空林風葉(天和三年自悦撰)女奴江戸鬼灯や色このみ(山川)女奴  
の勝山などをいふこの後ながら名筆傾城鑑(寶曆二年三月)といふ淨るり使者の段中おも頭と見えたるハ  
又平が思ひ付大紋の袖龍頭巻大津祭の大長刀横たへ江戸彩色の頬うまへ紅粉をき茶碗のわれたる如く云  
ふありこゝ江戸彩色と赤き色をいへるも同意なり(俳優の打扮も昔より面を赤く染るハ江戸風なるべ  
し)されバ江戸はづきとい其色の勝れて赤さを稱せし名もて恐らく江戸あていひ出し名もあるべ  
からず

○懷子(九)枝ながら吹はづきや風の口同集(十)小姫こそおも露うゝりてはづきも吹口ひるもべあ  
そめう又これを繪のけんみ用ひしと洛陽集山の繪鬼灯の日を出されたり(正長)又はづきや穴あ音を鳴  
虫くひ齒(心計)此句六玉川(八)はづきの奥齒あなるどうまい音と似たり

○大倭本草はほうといふ虫酸醬の葉を好みて食ふ故はづきと名付といへるハ假字違ひみて誤なり枕草  
紙お夕がほの事をいふあ惡き實の有るまこと口をしけれなどてさはた生出けんぬうつきなどいふも  
のゝやうふたあわれうし新撰字鏡ハ酸醬を訓りよりておもふ其實下ふうつむく故額突ふ似たれなり  
はづきへふくらうみて人の頬にたとへしなるべし突ハ前と同義なり但し額突といふとあれど頬つく  
といふと他(ホカ)ふなけれバ外(ソト)花(ハナ)ありて生たる處をぬうつきといひこれをひきて吹ならず時はづきといふ  
つくつらつく良つくなど同じきあや

○海はづき物類稱呼ハ海はづきうんさうの卵なり岩あるひハ流れ木ハ卵を生つけ置を取て海はづ  
づきと呼小女口ハ含鳴す其色黄なるを梅酢を以て是を染て赤くなすなり江戸ハ安房より出すといへり

○煎を安房にて磯はづきと呼よしなれどもこハ九州の産ふて東國あハなきものなるハ此名あるハ其殼の  
漂れよるとなどのあんなるふや此物うゝる名ある故ハ海はづきをそれハ卵なりと誤れり海はづきは  
蜆螺(長ニシ)の卵なり其介ハ形玉螺より大ふして長し肉ハ紅螺ハ似たり腸辛辣なる故幸ふしと云ふ又夜  
なきともいふハ小兒夜啼の呪あ用るよし本朝食鑑みゆ海はづき江戸近國の産ハ形小し大なるハ加賀  
能登より來れるなり長刀はづきといへるものハ紅螺の卵なり

○草の葉を鳴すと俳諧口寄草(元文元年)手を打ふけりく豆の葉ハ穴をあけてハ嬉しがり六玉川(初篇  
寛延三年)鳴して捨る葉ハ残る月(鳴したる葉ハ圓く孔あくなり)

○葱を吹ハ東坡被酒獨行詩ハ總角黎家三小童口吹葱葉送迎翁

○下總千葉あたりハ七月七日ハ小兒まよもと以て馬を作り緒を付て首あかけ馬を腰ふ付て遊ぶ散木集  
みをさなきちこのちまき馬をもちたるをみて「ちまき馬ハ首うらさハぞ似たりけるきうりの牛ハ引らう  
らなしといへる連歌あり其馬も同じほどの物なり古より有し弄びなり信濃常陸あもあれを作りて七夕  
あ手向けるとぞ思ふあたまた棚あ手向七夕ふたむくるハ後ふてもと小兒の戯物なるべし

○篠船さゝ葉ふて作る舟ハ夫木抄源仲正「うなるこガ流れふうくる笹舟の泊りハ冬の氷なりけり詞林采  
葉抄ハ神無月をハ出雲國にハ神在月とも神月ともなり我朝の諸神參集り給ふ故なり其神在の浦に神々  
來臨の時少童の作れる如くなる篠舟波上に浮ぶ事不可及算數

○松葉の鎖明和二年川柳点の句(迷惑など)禮の供松葉でくさりこしらへる

○茶碗の尻を掌ふ付ると雜戲勘卷(筆者定うならず野々村などガ書にや元禄中の風俗なり)其内ハ此圖ハ



り古き前付付(表題缺年号もなし)はなれうねたり(手のうらへ茶碗の尻をねじり付

○瓜ざし是も同書巻物ふ瓜を多く并べて小刀を持たる男横さまふ瓜をさし貫くひとするを見て居るもの  
一人あり相手の男なり漢土の瓜戦の類なり五雜俎に錢氏子弟取言上瓜各言子之的數割之以觀勝負謂是瓜  
戰(子の數をいふたね柿といふと似たり)葛藤(下)許道獨吟「落る雷七八町いあたまなり瓜食勝て勘  
三どろなる(是ハ負也)さふ歌舞伎をみするなるべし」又同じほどの戲廣東新語(九)廣州兒童有賭蔗闘柑之  
戲蔗以刀自尾至首破之不偏一黍又一破直至蔗首者爲勝柑以核多爲勝こゝにて小兒なぞ蜜柑の袋の數をい  
ひて當否を論ずこれをもておもふに瓜の核柑の核など數多く煩ハしきをいひて戲とす異國の人の所作  
のゆるやうなるこゝの人といたく殊なり

○次であいふ和名抄ふ熟瓜和名保曾知とあるをおもふ越瓜などのよくつえたるといふあやほろちの帯  
のおのづから脱る程ふ熟くつえたるをいふ美濃の眞桑村の産なぞ出たる後のとなるべしもし今のまくと  
瓜などをほどの落るまで取らでむらば腐りて喰ふべうらず清慎公集に女御すのこほろちを長ひつゝ入  
ておろせ給へるを夕立のすればみかうしおろしたるまざれあうせされバ盗人のほろちをみてあめふれ  
ばはしうりどてやとりうくすらん干瓜などいふ熟い内みどるもの歟又別種みや

○豆奴祭文がたりの山伏一乗と云ものゝ作と云ふ西行東下り照降町の段りゝる處へ向ふより深みかき  
あて評判の豆奴あたまも豆ならおむむ豆ひやうばんの豆奴とあり高輪の處みくらの上りしとをいへ  
るい寛政十年戊午五月初日のとなり

○菓物の燈籠廣東新語廣州時序の條八月十五之夕、兒童燃番塔燈、持袖火、踏歌於道曰、灑樂仔灑樂兒無昨糜塔

果碎瓦爲之、象花塔者其燈多、象光塔者其燈少、袖火者以紅袖皮彫鏤人物花草、中置一琉璃盞、朱光四射、與素馨茉莉  
燈交映、蓋素馨茉莉燈以香勝、袖燈以色勝、まの方みて西瓜の肉を削り取て中ふ火をともして青くみゆるも  
おなし類なり







